
リリカルな没案！

怒離留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルな没案！

【Nコード】

N45980

【作者名】

怒離留

【あらすじ】

没案を投稿してみようと思いましたが投稿します。

前もって言うておきますが、一人目の転生者はこっちで二人目はシイルです。

言うておきますが没案です。神と悪魔のパシリ？に出したいがゆえにあげることにしました。過度な期待は止めてください。あちらとのつながりはあまりありませんが、あっちがメインです。駄文すぎます。

第01話「始まりは突然に……」 (前書き)

更新したくない。半分黒歴史。

始まりが一緒なのはあっちの1話が面白くなかったからこっちのを書き換えて入れたから。

第01話「始まりは突然に……」

んっ！

ここはどこだ？

??（少女）「気が付いたか？」

俺の目の前には金髪ショート碧眼の少女が立っていた。

??（男）「覚えてないのか？」

長い髪の男「まかでみの佐久間榮太郎のような姿」の男がこちらに話しかけてきた。

俺はここに来る前のことを思い出す。

たしか、俺は車にひかれそうな子供（7歳くらい？）を自分のいた方に突き飛ばし、俺はその子の代わりに車にはねられて……

男「思い出したようだな？」

俺「は、はい、それであの子は無事だったんですか？」

少女「ええ、あなたが突き飛ばしてしまったことによる擦り傷以外は無事です」

男「ついでに言うと君が死んだところを見るのがなかったためにそれによる心の傷もない」

俺はほっとする。あんな人の死に方をみたらかなりのトラウマになるだろうからなあ……

男「人を救ったという優越感に浸っているのか？」

俺「いえ、俺は自分の自己満足のために人助けをしたいだけで、目の前でもう人が亡くなるところを見たくありませんから」

男「面白い奴だなお前」

俺「そうですか？」

少女「そんなことより」

少女は本を6冊持ってきた。

男はそれを見て

男「そうだった」

俺は何か分からずにいた。

男「そうだ、お前、ここがどこだか知っているか？」

俺は考えてみる

俺「地獄？」

俺は自分が地獄に行く人間だと思っている。好き勝手に生きているからな。

男「地獄か……まあ、あっているかな？」

少女「嘘をつくな！」

ドッ

少女はどこから取り出したのかハンマー（大きい）で男の頭を殴った。

俺は唾然としてその光景を見た。

少女はこちらに向かって言った。

少女「お前、リリカルなのはを知っているな？」

それは俺が好きなアニメである（とらいあんぐるハート3も好き）まあ、オタクではあったからな俺はうなずく

男「なら、俺達は同志だ」

俺は言っていることが分からない。

男「実はな、お前は死ぬ予定ではなかったんだよ。」

俺は更に意味が分からなかった。

少女「私の所為なのだ。」

少女はしょげる。

男「実はこいつが転んでアカシックレコードをふっ飛ばし数枚のアカシックレコードを壊してしまったんだが、まあ、お前の世界のアカシックレコードは壊れなかったが、その時にお前が因果律から離

れた。俺達はどうしたらお前をお前の世界から離すことができるか考えたできるか考えていた矢先にお前は死にこちらの世界にきた。ちなみにお前が一人目なんだが二人目はもうすでに転生した。」

少女「すいません。私の所為で・・・」

男「ついでにお前にはアカシックレコードが壊れてしまい因果律がおかしくなった世界に入ってもらい、因果律から外れた存在の回収とせつかくだから俺達の考えるシナリオに書き換えてもらいたい。」

俺「つまり、俺にあなたたちの尻拭いをしろと？」

男「そうなるな」

少女「すみません」

俺は考えてみる。一応死んだ身だし、死んだ時より苦しいことなどないだろう。

ここにいたって暇だし。それに転生SSか、面白い！

俺「わかりました。で、俺に対する見返りは何？」

男「それはな、お前の行く世界がアニメの世界などの入り混じった世界だ。」

少女「とらいあんぐるハート・リリカルなのはの世界が混ざった世界です。」

男「あと、バグがあるはずなので修正してもらいます。」

少女「何体かはわかりませんがこちらで発見したものを倒してください」

俺「確かに面白そうであるから俺にメリットがあるが……」

男「元の体では戦えないだろうからな、用意はしたさ」

少女「魔力出力SS・魔力保有量SSS・御神の剣を扱えるように吸血鬼化までしました」

吸血鬼化？吸血鬼になるんじゃないの？

男「ついでに、本人の意思での性別変化まで可能だ。」

意味はあるのだろうか？

男「言ってもらおう世界にはネギま！の世界もある」

なるほど……

俺「俺が最初に出会う人は？」

少女「あなたは赤ん坊のときに不破静馬にひろわれ御神の剣を教わります。」

男「ちなみに、世話は全部美沙斗さんがしてくれるぞ」

俺「いや、それ俺のメリットになってないし！」

少女「最強オリエ主になることそれがあなたのメリットです。」

男「デバイスなんかはこの魔導書に付けておくからな」

少女「ちなみに魂のなかに内蔵されます」

便利すぎるだろ。

俺「わかった」

男「そういえば、俺の名前は佐久間栄太郎でいいから」

少女「私はサクヤでお願いします。」

俺「わかりました。佐久間さん、サクヤさん」

佐久間「で、話は戻すが、お前を転生させるには時間がかかるんだわ、その間に俺たちがやる仕事を手伝ってくれないか？」

俺「わかりました。何をすればいいのでしょうか？」

佐久間「よくぞ聞いてくれた！！これからやってもらうのは宝くじに当たる人の選定と同人誌のべた塗りだ！！」

俺「後者はおかしくね!？」

佐久間「ナイスツツコミだが、本当にやってもらう!?!ちようどあいつがないから人手が足りなかったところだ!」

俺の苦悩の日々はここから始まった。

第01話「始まりは突然に……」（後書き）

何も考えずに投稿した。反省はしないが後悔はしている。
コメントをください。特に神と悪魔のパシリ？に

人気が出たら更新していく予定です。

第02話「しこ都合主義」(前書き)

ヤバいかも・・・

第02話「ご都合主義」

俺は生まれた時から記憶があつた。何故？だから俺が生まれる瞬間のことも覚えている。

俺は生体ポッドで生まれた。それは、俺が最強の生物兵器として誰かが生み出されたからだ。

普通に成長させてから俺を出すのかと思いきや、完成は間違いないため。我々のために働くように赤ん坊から教育するらしい。もう無理だけどね。

俺は一般の赤ん坊と同じような体重になつてから生体ポッドから出された。もちろん俺は呼吸するために泣いた。そして、俺のことを育てるために粉ミルクといろんな菌や病気に対する耐性の情報を入れたらしい何かを混ぜていた。そして飲まされた。味はなかったが別に大したことはない。

三日ぐらいしたら、俺は寝てる時に管理局が逮捕しに来たらしい。俺は研究員が忙しくて俺の前からいなくなった瞬間に俺の魂からデバイスができて佐久間さんに指示された所に転移する。そして、静馬さんに拾われた。

俺は4歳になつた。最初、本当に言われ当理に美紗斗さんに育てられた。

生まれた時は三歳くらいまで暇なんだろうなあ〜

この羞恥プレイの中で！

なんて考えていたが、寝てる間に戦い方を学習させられたために以外に三年間暇をしなかった。

俺の拾われた4月7日が俺の誕生日で、俺は不破悠馬と名付けられた。

俺の拾われた次の年に美由希が生まれた。

俺は少しずつ体を鍛える。

サクヤさんに御神家宗家の爆破テロの日をあらかじめ教えてもらっ

ていた。

それが今日だ。俺は予定通りに蔵に忍び込み倉の中にあるものを封の書に入れる。(やっぱりチートだろ!!!物質を魂に内蔵するなんて!!!)

さつき俺を母さん(美沙斗さん)が探しているようだったが見つからないように気配を周りに溶け込ませます(これの特訓は大変だった)。母さんはその後美由希が具合を悪くし、病院に連れて行った。

俺は父さん(不破静馬さん)を爆発で即死しない程度のところに呼び出す。

父さんが呼び出した場所に来ると同時に爆発、俺と父さんは吹き飛ばされる。

俺はかなり傷つきながらも動ける。父さんは血だらけになってもう死ぬだろうところだった。父さんがとっさにかばってくれたようだ。

俺は神様に言われた通りに生の書に魂と遺伝子配列と記憶をとる。それが終わると父さんは静かに息を引き取った。<魂がないからだろう……>

俺は急いで(気配を消し、姿を魔法で消しながら)美由希のいる病院にいった。病院に行くと、母さんが俺を抱きしめた。

俺はそのまま倒れた。俺が起きると不破士郎さんがいた。

俺「母さんは？」

士郎「今、本家の被害を見に行ってる。」

俺「母さんに伝えて、父さんは生きてるって。僕は犯人を見たって」

士郎「!!!?わかった。伝えておく。」

俺はそれを言うと眠りについた。

??」「……馬、悠馬」

俺「……んっ？母さん？」

俺が目をあけると母さんがいた。

俺「っぐ！」

母「大丈夫？」

痛いのは頭をうったからだろう。今更な気もするが……

俺「うん、大丈夫だよ、母さん。」

俺は気配を探る。

士郎さんはいるようだ。

母「テロの犯人を見たって本当？」

俺「うん」

もちろん嘘だけだね。

母「特徴を思い出せる？」

俺「うん、でも、扉の向こうにいる士郎さんには聞かれたくない」

母「いつから気付いていたの？」

俺「最初から」

母は扉のほうにいる土郎さんに話をしている
たぶん一度離れてもらいたいといったのだろう。
土郎さんが離れていく。

母「これでいい？」

俺「うん、でも、念には念を入れるね。」

俺は小さい結界を張る。

母は周りの空気が変わったことに驚いていた。

俺「心配ないよ、結界を張っただけだから」

俺は少し母に微笑む。

母さんは少しを落ち着いた。

俺「母さんは父さんの死体を見た？」

母は少し驚き涙ぐんでいた。

俺「見たんだ、僕も近くにいたからね、父さんが死んで行くところ
を見たんだ。でも、僕は父さんの体から父さんの魂と遺伝子データ
と記憶を持ってきたんだ。」

母は意味が分かっているようだ。

俺「まずはね、僕は前世の記憶があるんだ」

母はよくわからないといった顔していたのでかなり面倒だが俺の前世の世界の話をした。

話が終わると母さんはやっぱりわからないといったふうに顔をしていた。

俺「話は変わるけど。爆破テロを起こしたのは『龍』っていう組織だよ。組織の人の腕に龍のマークが入ってるんだ。」

母「『龍』っていう組織がテロを起こしたんだね。わかったよ。」

母さんは部屋を出ようとする。

俺「待って！母さん。」

母さんはこちらに振り向く

俺「どこに行くの？」

母「ト、トイレに行くんだよ。」

俺「嘘はいいよ。それより、父さんを生き返らせよう。」

母はこっちに向かってくる。

母「人はね、死んだら生き返らないんだよ。」

俺「知っているよ。そんなこと、前世の記憶があるんだから。」

母「そうだったね。ならなんで父さんを生き返らせようなんて言う

んだい。」

俺「さっき言った父さんの魂と記憶があれば父さんのクローンを作りだして、生き返させることができるよ。」

母さんは俺の目を真剣に見る。

母「よくわからないけど本気のようなね、ところでクローンって何？」

又、長い話が始まる。美沙斗さん理系の知識なさそうだもんね。

第02話「」都合主義」（後書き）

とら八ではなくリリカルです。そして没案です。
人気が出たら名前を変えたいので、名前の方の意見をください。

第03話「侵略といじ名の復讐」(前書き)

予約での連続投稿ですよ。

第03話「侵略という名の復讐」

俺と母さんは今、北海道にある『龍』の研究所に襲撃をかけている。俺は外から結界を張り外との連絡と脱出する方法を絶つ。

偶に俺に向かつてくる実験体と研究員がいるが、殺傷設定の魔法で殺す。

結構簡単に人が死んでいく。人間って結構もろいんだね。研究所の中に行った母さんはまだ出てこない。

俺はしばらく暇だなぁと考えていた。

まあ、人を殺す罪悪感はあるものの護るために殺す。当然のことであるものの心に少し響く。

もってきた母さん手製のおにぎりを一人で食べる。

この隙に襲おうする奴もいるが撃ち落とす。

気配（殺気）がわかりやすいため殺りやすい。まあ、銃弾が当たったとしても痛くもかゆくもないだろうがね。

などと考えていると母さんが来た。

俺「終わった？」

むしゃむしゃ

母「行儀が悪いよ」

俺は口に入っているものを飲み込む

俺「すいません」

俺は立ち上がり研究所に入る。

研究所の中は母さんに切られた人でいっぱい。少し血が飲みたいな

あと思っっていると

母「子供が見るものじゃないね」

俺「あの、一応俺は前世の記憶があるので子供では……」

母「慣れてないでしょう……」

そうですね、でも俺には魚が捌かれてあるような、食欲と気持ち悪いという感じが同時にあった。

俺「はい、でも、気持ち悪いか母さんが怖いなあとは思ってませんよ」

俺は母さんに微笑む。

母「わかったわ、でも慣れないようにね」

俺「はい」

話しながら研究室の奥に向かう。

おっ！

目的のものの発見！

生体用ポットと培養液。たぶんさっき襲ってきた実験体を作ったのである。あつてよかった。

俺はそこにあるPCを起動しUSBにデバイスを繋ぎハッキング、そして遺伝子情報の書き込みと培養を始めた。

子供の手だと操作しにくいな。まあ、しかたないか。

ここをああで、こうでこうなって……

母「悠馬、なにか手伝えることある？」

俺は少し考えて答える。

俺「コーヒーとサンドウィッチをください。作業に時間がかかりそうだから、あと、コーヒーに砂糖やミルクを入れないで、入れると飲めないから」

いや、マジでブラックコーヒーしか飲めないんですよ。

母さんは戦力外通告に少し肩を落とし、研究所のキッチンに向かった。

俺はPCでの作業を終え、生体ポッドから離れた。

時計を見ると2時間も経っていた。チート能力を使ってこれか・・・俺は母さんのもとに向かう。

母さんは俺に気配で気付き俺がドアを開けると微笑んでくれる。すごく癒されます。

俺「コーヒーはブラックをお願いします。」

母「わかったわ」

母は持ってきたインスタントコーヒーを淹れてくれた。

俺はそのコーヒーに一口付け話を始める。長い間飲んでなかったためコーヒーの味が懐かしかった。

俺「母さんも父さんと一緒に人生やり直さない？」

母さんは意味が分からないような顔をこっちに向けた。

俺「つまり、父さんの体を完全に復元することはできないから5歳児くらいまで生体ポッドで成長させるけど、後は時が体を成長させるのが一番だからね。」

母「つまり、私も静馬さんと一緒子供に戻ったらと？」

俺「母さんは一応裏の社会で有名な人だし、父さんを守りながらの生活には無理があるでしょ。母さんも死んだことにすれば敵はいなくなる。それに、父さんと幼馴染になれるよ」

母「でも、悠馬と美由希のことがあるし、それについては考えてある。」

ここでいろいろな話をする。

その後、俺はいろいろなところからお金を稼ぎ、株に替え、株価が上がるであろうところを買いまくった。

そして、俺は眠りに着いた。約8年という時間を・・・

第03話「侵略という名の復讐」(後書き)

作者「今回は文字数が少ない」

シィ「こっちの方はいいのか？」

作者「ああ、一応、いくつか次の世界の希望はいただいたので更新を続けさせていただくことに決まったはず・・・」

シィ「決まってるのか!!」

作者「意見をください!!」

作者はブラックでしかコーヒーは飲めません。
何故かわかりませんが・・・

第04話「名前を呼んで……なのか？」（前書き）

連続投稿（予約）

第04話「名前を呼んで……なのか？」

俺、こと佐々木悠馬は佐藤静馬という、名に改姓した父の隣のマンションの部屋に住んでいる。母は高町美沙斗として生活している。

一応、俺の部屋には前世に使っていたPCと前世に持っていたまんが本・DVDなどがある、これは神様が封の書に入れてくれたものだった。iPodなどもあったが……

他にも、ミッドチルダ・ベルカの魔法についての資料やデバイスの研究などがあった。

自宅の鏡は神様との通信で使われる。いろいろな情報の交換が行われる。偶に、バグを修正するために他の世界を飛び回ったりしたところだ。

母さんが美由希の料理についていろいろと指導したがダメだったらしい。俺と父さんが犠牲になったことは追記する。あれは料理ではありません。バイオ兵器です。

逆に俺はきちんとできているもののレパトリーが少ないということだ、高町さんちの桃子さん、美沙斗さんに教わっています。桃子さんが俺に女の子としての成長を期待したのはここに書かなくてもわかることです。

まだ、士郎さん以外に悠馬として会っていません。俺は女の時は佐々木涼と名乗っています。女の姿はゆっくりと成長しています。

ちなみに、時間を操る魔法が得意なために自分や対象物または対象者の時間を操れる。これは神様にもらった魔法の一つである。故に自分の年など関係ないのである。あと、俺は恭也に月村忍と結ばれてほしいので、地味にいろんなフラグを折ってます。この前、巫女さんのフラグを地味に折りました。

そういえば、士郎さんの仕事にこっさりついていき、エリスに爆弾<クマの人形>を渡すおっさんがいたので、爆弾をエリスから奪い<泣かれましたが>

おっさんに返し爆破！不破士郎は死にませんでした。

不破士郎の死によつての過酷な鍛錬で膝を悪くしないことになりましたが、剣術の腕が原作より落ちるのではと思いきやライバルが多いためにそんなことはありませんでした。ということをごここに記す。今、女の俺はいろいろあつて失踪中です。その後は、男として普通？に育っています。

なのはが6歳になり、なのはの同級生として私立聖祥大附属小学校に入学する。三年生になるまではなのはと一緒にのクラスになることはなかった。俺はただ教室で本を読む変な奴と思われている。俺に小学生と仲良くなれというのが間違いなのだ。たまにいじめてくる奴もいたがるくのしたくばれないように。成績はいつもトップになるように努力した。ここでトップにならないとなのはとの接点なくなる。＜アリサとの接点だが……かつて見たリリカルなのはのSSにはオリ主の接点がこれだったからな＞

三年生になったある日の昼、教室でコンピュータのプログラムを本気で勉強しようと思えば取り出すと、アリサが話しかけてきた。

アリ「ねえ、あんた、なんでそんなに勉強ができるのよ！」

俺は用意しておいたセリフを言う。

俺「本が好きだから？」

俺に勉強ができるのは前世の記憶があるからとこのチートボディのおかげです。＜記憶力がよくて楽です＞

後、ぶつちやけかなり頑張つて勉強しています。ここ最近まで高校の復習をしました。

アリ「なんでよ、この私より勉強ができて、運動神経もいいなんてありえないのよ」

まあ、普通の子供ならこの時期は女の子の方が体力あるはずですね。

俺は負荷を掛けているからそれを外したらオリンピックで全種目で金が取れますよ。

俺「偶々です」

嘘です

アリ「そんなわけあるか〜！」

ですよ〜

すずかさんより運動神経いいですからね。

すず「もう、アリサちゃん。悠馬君に喧嘩を売らないの」

アリ「あんたもおかしいと思わないの？」

普通思います。

なの「私も思うけど……」

アリ「あんた実は年を誤魔化してるんじゃないの？」

正解！

俺「そんなことどうやってできるんですか？」

すず「薬で体が縮んだとか」

どこの名探偵ですか？
危ないネタを使うな！

俺「そんなアニメみたいな展開はないですよ。一応保険証がありま
すけど見ますか？」

三人は興味しんしんで俺の保険証を見る。
全然普通に俺はなのと同じ年だとアピールする

アリ「年齢に偽りはないわね」

でも、なのはが食いつく。

なの「あれ？保護者がお父さんになってる。」

すず「本当だ〜」

俺は予想道理で助かった。

ナイスなのは、気付いてくれてありがとう。

俺「一応俺は土郎さんの兄が俺の父さんんだけど、両親が亡くな
って、土郎さんに保護者になってもらっているんだ。俺のこと聞い
てない？」

言わないように言っていた。聞かれなければ。
なのはが首を横に振る

なの「きいてないよ〜」

少しかわいいと思った。

アリ「あんだ、大変な人生送ってるのね。」

俺「両親には悪いけどかなり楽しく生活を送っているから別にいい。それに一人には慣れてるし」

アリサ「さらっと、不幸なことを言わないでよ」

俺「どうしてですか？」

アリサ「不幸が伝染る」

俺「くっハハ」

笑う

アリサ「な、なによ」

俺「不幸は伝染しない。むしろ、一人が不幸になることで他人が救われるだろう。それが人間だ」

アリサ「何わかんないこと言ってるのよ。」

すずかはポケーとしています。

俺「後、質問はありますか？」

アリサとすずかにはないようだ。

なの「悠馬君も剣術やってるの？」

俺「はい、やってますよ」

かなり前からですけどね。

なの「そうなんだ」

俺は弁当を取り出す。俺の作ったものなのでうまいです。

なの「悠馬君、これから一緒に食べない？」

ありがたい。これからどう関わろうか考えていましたから。

俺「はい。喜んで！」

俺は屋上へと向かった。

第04話「名前を呼んで……なのか？」（後書き）

シィ「ツッコミどころ満載だが？」

作者「だから黒歴史だって言っているだろう？」

シィ「わかったよ」

誤字脱字は報告お願いいたします。
修正は致しますので。

第05話「ジュエルシート飛来」(前書き)

連続投稿ですよ。

第05話「ジュエルシード飛来」

ついにこの日がやってきたようです。

俺はジュエルシードらしきものが降ってきたその日に三つゲット！俺はなのは達と仲良くなり、リリカルなのはの世界に混じり始めた今日この頃。

そんな矢先に『助けて……』とのユーノからの念話、がん無視です。一応、ユーノの発見現場には遭遇その後、塾のない俺が動物病院に預けに行き、なのは達にメールを送る。

これで完璧！

姿と魔力・気配を消し、なのはの初魔法をきちんと映像に捕らえておきました。

俺はそれに満足し帰り道にジュエルシードを発見し回収しようと思いきりました。

フェ、「それをこっちに渡して！」

チッ

フェイトに見つかりました。

人気がない場所で気配を消してて、安心してました。頭の演算に負荷を掛けているから楽をしがちです。

俺「何のこと？」

とぼけてみる。

フェ、「あなたが今拾ったジュエルシードを渡して！」

俺「ジュエルシード？」

やばい、アルフが上から見てる。(気配がする)

フェ「青い石なんだけど。」

俺「これのこと？」

ジュエルシードをポケットから出しフェイトに見せる。

フェ「それ、渡してくれる？」

俺「わかった、だけど、少し俺と話をしないか？」

なのは的お話しは勘弁だが。

フェ「いいよ。」

話のわかる娘で助かる。

俺「じゃあ、そのファミレスでいい？おごるから！」

フェ「わかった」

俺「上にいる奴にも奢るよ、だから降りて来てくれないか？」

アルフは驚いた様子だが降りてくる。

人間形態だった。

一応耳や尻尾を隠しているようだ

アル「いつから気付いていた？」

俺「君が来たときから。」

フェ「そんな様子見せなかったのに……」

俺「俺にだって君たちになわなないことくらいわかるさ。だから警戒しないでくれ」

俺の魔力値はDに見えるようにしている。

まあ、ばれないだろう。

小太刀も持ってないしね。

アルフはかなり警戒していたが、フェイトは警戒を解いてくれた。優しい娘？甘いのか？アルフを信じているのか？

俺達はファミレスに入り席に着いた。

フェ「早く、ジュエルシードを渡して」

俺「食べてからでもいいだろ」

アルフは俺に敵意むき出し。

視線が痛い。

俺「俺は逃げないし、約束は守る。それより君の名前を教えてくださいませんか？俺は佐々木悠馬っていうんだ。悠馬でいいよ。」

フェ「わ、私はフェイト……。フェイト・テストロッサです。」

知ってるよ。

俺「あなたのお名前は？」

アルフに聞く。

アル「あんたに教える名はない。」

フェ「アルフ、失礼だよ。」

俺「アルフさんだね」

アル「ふん！」

あらら、そっぽ向いちゃった。

俺「好きなの食べていいよ。ここにメニューがあるから好きなのたのんで」

二人は真剣にメニューを見、決めたようだ。

俺「フェイト、決まった？」

フェ「は、はい」

俺はフェイトに聞く。

俺「アルフさん、決まった？」

アル「決まったよ」

俺「フェイト、そのスイッチ押ししてもらえろっ？」

フェ「は、はい」

ピンポン

しばらくすると店員が来て注文する。

料理が来るまでフェイトと話をすることにした。

俺「何でジュエルシードを集めるの？」

フェ「母さんが必要だって言っていたから。」

アル「フェイト、何でこいつに話すのさ」

俺「俺の両親は俺がもっと小さいときに亡くなったから思うけど、親は大切にされた方がいいよ」

フェ「ふえ？ご、ごめん、辛いこと思い出させちゃって」

掛った！

戸籍上死んでるけどね。生きてるよ。

まあ、前世に親はなくしてるから辛さはわかるけどね。

俺「フェイトはいい子だね。まだ小さいのに親孝行なんて。」

アル「お前も小さいじゃん」

まあね。俺はプレシアさん嫌いだけどね。

俺「人はね、何年生きたかじゃないんだ。どんな経験をしてきたか

なんだよ。」

俺は前世の記憶も持つてるし、かなり濃い人生を送ってると思うよ。

アル「私にはわからないね。」

俺「そうだろうね、俺の言葉じゃないしね」

アル「お前もわからないんかい！」

アル「フのいいツッコミがはいつた。」

俺「とりあえず、フェイト、俺と友達になってくれない？」

フェ「へっ?」

アル「フェイトこいつと友達になる必要なんかないよ。」

俺「これを見ても?」

俺はポケットからカードの中に嚴重封印されたジュエルシードを見せた。

俺「一応約束のジュエルシードは渡すね」

俺はさつき拾ったジュエルシードを渡す。

フェ「そのジュエルシードも渡してくれないかな・・・」

俺「やだよ。この封印は嚴重だから危なくは無い」

フェ「それでも渡して!!」

俺「友達になってくれるか?これは友達になってくれるなら渡す。」

アル「お前何言ってるのさ」

アルフが怒っている。

俺「嚴重に封印されているからこれを持っていったとしても解凍するのに最低二年はかかるよ」

俺はカード化したジュエルシードをフェイトに渡す。

フェイトはカードを調べるがカードの解凍方法に見当がつかないようだ。

フェ「わかった、悠馬。私と友達になってください。」

俺「ありがとうわかってくれて。これでフェイトと俺は友達だね。」

俺はメモ帳を取り出し、携帯番号と家の場所を書いて渡す。

俺「何かあったらここに連絡してよ。できる限り力になるから。」

フェ「ありがとう」

フェイトはそれを受け取りポケットにしまう。

俺はフェイトからカード化したジュエルシードを受け取る。

俺「解凍に時間がかかるから二人はデザートでも頼んで食べてて。」

アルフがパフェを頼み二人はそれぞれのパフェを食べる。

フェイトが鼻にクリームを付けていたので俺はハンカチを取り出し。

俺「フェイト、動かないで」

俺はフェイトの鼻についたクリームを取ってあげた。

フェイトが少し赤くなったが気にしない。

俺「可愛い顔がもつたいないよ。」

俺はフェイトに微笑む。ニコポなんてできないですが、段階的に落としましょう。

決して結ばれる気はありませんが・・・

俺は二人が食べ終わるのを待ち、解凍し終わったジュエルシードを渡す。

俺「じゃあ、会計してくるから帰ってもいいよ」

フェ「さ、さよなら」

俺「ちがう、こういふときはまたねって言うんだよ」

フェ「またね、悠馬」

アル「またね、悠馬」

二人は去って行った。

二人との出会いと友達になれたことに対する出費は痛いがまあ、財布の中に諭吉さんが五枚あって助かった。

第05話「ジュエルシード飛来」（後書き）

作者「どうしてこうなったんだろう？」

悠馬「知らん」

作者「オリ主T u e e e ! がやりたかったんですよ。でも、何故ハーレムになったんだろう？」

悠馬「お前が書いたんじゃないのか？」

作者「私ですけど、一年前くらい前に書いたと思うんだよね。覚えてないけど」

悠馬「この小説を書いてから神と悪魔のパシリ？を書いたのか？」

作者「正直、飽きたからあつちを書いたんだけど、あつちも本当はハーレムで書こうとしたら失敗した。でも、かなり書いたんだよ。」

悠馬「そっちは投稿しないのか？」

作者「絶対嫌だ！！！」

第06話「吸血鬼って怖い？」（前書き）

眠い、修正箇所多すぎ・・・

第06話「吸血鬼って怖い？」

俺はいつものように学校で授業を受け、昼になのは・アリサ・すずかと弁当を食べる。

俺は図書室にあった吸血鬼の本を持って読みながら昼食にした。すぐくすずかの視線が痛い。

なの「何を読んでのん」

俺「吸血鬼の本」

アリ「何でそれを読みながらトマトジュースを飲んでいるのよ」

俺はトマトジュースをストローで飲んでいる。

俺「吸血鬼の気持ちかわかりたい」

なの・アリ「？」

ちらつとすずかを見る。

少し怖い。黒いオーラが出ている？いや、恐怖があるようだな。俺も吸血鬼だけどね。

アリ「ところで、それ、おいしいの？」

アリサがトマトジュースを指さして言う。

俺「まずい…」

なの「まずいの!?!」

なのはナイスリアクション!

俺「俺の口には合いません!」

アリ「じゃあ、何で飲んでるのよ」

俺は首を傾げ

俺「知的好奇心?」

アリ「なんだそりゃ」

俺「たとえまずそうなものでも食えるならば一度食べてみる。食べず嫌いはいやなんだ」

なの「じゃあ、悠馬君は何が嫌いな?」

なのはの首を傾げた様子がかわいい。

俺「うにく新鮮なのは大丈夫>と甘いもの、ブラック以外のコーヒ
ー」

アリ「甘いのだめなの?」

俺「基本的にはダメだが、翠屋のメニューはだいたい大丈夫」

なの「それはうれしいな」

だろうね。俺は翠屋のメニューを全部制覇したが全部つますぎて俺には再現不可だ。いつか完全に再現させてもらう。前世から料理の研究をしているがあんなに美味しいものは初めて食べた。

俺「すずか、なんか話に混じってこないけど体調悪いの?」

吸血鬼のことが響いています。

すず「う、うん、私は大丈夫だよ。ねえ、悠馬君、吸血鬼についてどう思う?」

怖いのか? ばれることが、こいつらは受け入れてくれるぞ。隠し事をしているのはお前だけじゃないからな。

俺「実際にいるかもしれないなあとは思う。だけど、いたところで別に怖くないし、ただ、いたということで、友達にはなりたくない」

俺は吸血鬼としては上から二番か三番くらいらしいからな。他にどんな吸血鬼がいるのか気になる。

アリ「どうして?」

俺「俺が吸血鬼のことを知りたいというのもあるし、何より、自分が吸血鬼だったら、いつか自分を化けものだって言って襲ってくるかもしれないっていう不安があると思うから」

なの「私にはわからない、普通は怖いって思うよ」

普通はな。でも、話ができるなら話をしてみたい。

もし、戦闘だけを行う種族ならもう滅びているだろうからな。
もしそうだったら人間の中で生きるのは結構きついはずだからな。

俺「本当の化け物っていうのは息するのと同じように人間や動物を
殺すものだ俺は思っている。だから、吸血鬼〓化け物ではないと
思う。」

アリ「でも、人は人を超えた存在を恐れるわ」

俺「そうだね。でも、俺は目の前にある幸せを邪魔するものの方が
怖い。」

なの「それって……」

なのは、気付いてください。俺も御神の剣士です。

アリサはわかったような顔をしています。伊達に誘拐されてません
ね。

そういえば、あの時に助けた時幻術で変身していたので俺とは知ら
ないでしょう。

すずかは……見ないことにしましょう。

こ、怖すぎる。精神衛生上ヤバい。

実際は泣きそうになっていました。

第06話「吸血鬼って怖い？」（後書き）

作者「すずかが可哀想・・・」

悠馬「お前が書いたんだ!!」

作者「記憶にありません」

第6・5話「番外？」（前書き）

書き直すは面倒ですからそのまま投稿します。
改行はしますが。

第6・5話「番外？」

俺はあらかた吸血鬼の本を漁り、次は何を調べるかを考えながら学校から歩いて帰ろうとしていた。

あっ！アリサだ。

アリサを発見。

なにやら。またまた誘拐事件のようです。黒服の人たちに囲まれます。

カプトゼクターがどこからともなく現れる。

黒服の男たちがカプトゼクターにはじかれる。俺はベルトを巻いておく。

はあ、あいつらワームかよ。

俺「おい、アリサに何をしようとしてるんだ？」

男「契約のためだ」

俺「だからって、友達の危機を見逃せない。」

男「そこをどけ！！」

男の姿がワームとなる。

やはりか。

アリサ「ちょ、な、なんなのよ」

俺はカプトゼクターを掴み、ベルトにさす

俺「変身」

【Henshin】

俺「キャストオフ」

【cast off】

【Change Beetle】

俺「アリサを襲おうなどと、死ねワーム!!」

ベルトの横をたたく

【clock up】

ワームをさつさと倒すためにクロックアップ。

サリスはまだ早く動いていないのでさつさとカブトクナイガン・クナイモードで切る

成虫体が一体だけ残った。成虫体をパンチを連打し、

【1, 2, 3】

俺「ライダーキック」

【rider kick】

俺はさつさとライダーキックを決めワームを倒す。

【clock over】

世界が正常に動きだし、カブトゼクターベルトから外れ、どこかに飛んでいく。

俺「ふう、アリサ、大丈夫か？」

アリサは驚いている。

俺「けがはないか？」

アリサ「な、なんなのよあんだ！！？」

俺は肩を落とし、ため息をつく。

俺「説明してやるよ。」

それから長いことアリサにいろんなことを話した。
納得はしたらしい。

第6・5話「番外？」（後書き）

作者「短い!!!」

悠馬「書き直さないのか？」

作者「面倒です。私は神と悪魔のパシリ？が書きたいんです!!!セ
リーヌさん最高です!!!」

第07話「俺とはやての出会い」（前書き）

サブタイトル考えるのが面倒です。あつたりなかつたり。昔の私は何を考えているのやら。そもそも6・6が短すぎ！！何これ！？300文字もない。

投稿しませんが、内容はなのはとフェイトがフォームに襲われているのを助ける話です。書き直す気はありません。投稿する気もありません。

第07話「俺とはやての出会い」

俺はふと図書館に行きたくなつたので図書館に向かった。

向かう先でジュエルシードを二個拾った。ラッキー

俺の持っているジュエルシードは四つ。

なのはは三つのはずだ。

フェイトはわからないが、この海鳴にあるのが残り四つということは海に六つなのでフェイトは三つ持っていることになる。

俺は図書館に着くと車いすに乗る女の子を発見！

上の方の本を取ろうとしているらしい。

俺はそこに行く

俺「どれを取りたいんですか？」

はや「その緑の料理の本や」

俺はそれを取り、はやてに渡す。

俺「これでいいですか？」

はや「おおきに」

俺「いつもここに來ているんですか？」

はや「そうや、うち、あんまり友達おらんから……」

俺「じゃあ、俺と友達になってくれませんか？俺は佐々木悠馬って
います」

はや「ありがとうな、うちは八神はやてや、はやてって呼んでな」

俺「俺のことも悠馬でいいよ、はやて。」

はや「なんかうれしな。こんなかつこええ男の子が友達になつてくれるなんて。」

俺「そうだ!」

俺はメモ帳に俺の携帯番号とメルアドと住所を書く。

俺「俺の連絡先だ、何かあったら連絡してくれ。友達だからな」

はやてはそれを受け取る。

はや「じゃあ、うちの連絡先も教えるからメモ帳とペンを貸してくれへん?」

俺はメモ帳とペンをはやてに渡す。

はやては連絡先を書いてくれて、俺に渡す。

普通の皆さんはここで連絡先を教えてはいけません。

俺「ありがとう、これから時間ある?」

はやては首を傾げる。

はや「特にこれからの予定はあらへんけど」

俺「はやての友達記念に翠屋のシュークリームを奢ってあげよう」

はやての顔がほころぶ。

はや「ほんま？」

俺「ああ、俺は人を見る目の達人だからな。いい奴と友達になれたらそれを祝うことにしている。」

嘘です。はい、嘔吐しました。

はや「よくわからん理由やけどおおきにな、悠馬くん」

俺とはやては翠屋に行き、お茶をした。

士郎さんと恭也さんがいたので、後でからかわれそうなのが目に見えるが、後で俺をからかうには五年早いことを教えてやる。

はやてと別れ、俺は明日、すずかに呼ばれたお茶会のことを思い出す。

明日じゃん！なのはとフェイトの出会い！

第07話「俺とはやての出会い」(後書き)

短いけど気にしたくない。あっちの方が重要です。
話が矛盾し過ぎてる・・・orz

第08話「なのはとフェイトの出会い」(前書き)

連続投稿ですか？

いいえ、黒歴史です。

第08話「なのはとフェイトの出会い」

俺はずずかの家に呼ばれなのは・アリサ・ずずかとお茶をしている。ファンリンがお茶を持ってくる。俺は内心ひやひやだ。なぜか、ファンリンさんはドジらない。

ユーノは猫に追い掛けられていたので、追いかけている猫を捕まえて俺の膝に置いておいた。猫はかわいいなあ。俺は猫も犬も好きである。なぜか怖がられることもあるが……。本能的にだるうか？

もしかして、ファンリンさんがドジらないのって俺のせい？

俺とアリサは犬のかわいさについて語っていた。

俺は大型犬が好きだよ。ちなみに猫をいじりながら話しているため説得力なしだが。

ずずかとなのははユーノのことを話しているようだ。

時折、俺をずずかが見てくる。

たぶん俺に危険がないと恭也さんから説明があったと思うんだけどなあ。

もしかして、忍さんに相談してない？

ユーノがアリサに回ってきた。

ユーノはモテモテ？

フェレットはかわいいもんね。それは人間だけだね。

ユノなのは、助けて、アリサちゃんが……』

アリサ……そのかわいがり方は異常だ。まるでムツゴロウさんくアリサはキスしないけど。ユーノ、かわいいそうだ。

さつきからジュエルシードが近くにあるのはわかるけど、手出ししたらイケないのはわかるので無視。

空気は読みます。

俺「そういえば、この前、八神はやてっという子と友達になったんだが、今度のお茶会には連れてきていい？」

すず「いいよ、私たちもその八神さんと友達になりたいし。」

俺「ありがとっ、今度は連れてくるな」

そんなことを話していると、ジュエルシードが発動する前に俺は用事があるから帰ると言って門から出ていき十分距離をとってから魔法でジャミング&女の子に変身しデバイスの起動、気配姿を消したのはのもとに駆けていく。

俺が現場に着くとフェイトがジュエルシードを封印しようとしていたそこに俺もストレージデバイス<この先使わないので壊れても知らんぷり>で封印する。

案の定ジュエルシード上で魔法がぶつかり、ジュエルシード暴走。やったね

管理局にばれたでしょうね

暴走したジュエルシードを見つめる二人俺はカードを取り出しカードを暴走したジュエルシードにぶつけるとジュエルシードがカード化され、俺の方に戻ってくる。

なのはとフェイトが俺を見る。

そこには、俺(マントをはおった白い長い髪に赤い眼少し長い八重歯の9歳の女の子)がいた。

なの「吸血鬼？」

フェ「それを渡してください」

俺「いやです。」

ユー「それは危ないものなんです。分かっているんですか？」

俺「わかっていますよ。だからこうやって私にしか解けない封印をしているんです。」

カードをみせるとフェイトは驚く。当り前だろう。元の姿の時にみせた封印したものと同じなのだから。

俺はフェイトに突撃し、フェイトを捕まえると街のはずれの山まで転移する。

ユー「なんだったんだ彼女はいつたい？」

ユー「なのはの足もとにある。さっきの女の子が持っていたカードに気付いた。」

ユー「なのは、これって」

なの「うん、それ、さっきの白い髪の子が落としたものだね。」

ユー「それはそれを調べる。」

ユー「解き方がわからない。確かにこれが本物のジュエルシードだ。っていうのはわかるのに」

なのはとユー「なのはそれを持って行って後で考えることにした。」

第08話「なのはとフェイトの出会い」(後書き)

セリ「なんでこんなに短いのでしょうか？」

作者「わ、わかりません！」

セリ「もっと考えて文章を作ってください」

作者「本当にすみません」

第09話「フヘイトとの再会」(前書き)

予約投稿！まだ現実はまだ10月です。

第09話「フェイトとの再会」

俺「ふう、これでいいだろ」

俺は変身と吸血鬼化を解き、抱えているフェイトを起こす。
気絶させたのは怒ってるだろうな

俺「フェイト、起きて」

俺は起きないフェイトを膝枕し起こす。

フェ「う、うん……」

フェイトは起きると俺を見、びっくりする。

フェ「ゆ、悠馬!？」

俺「やっと起きたか、気絶させなきゃよかった。」

フェ「じゃあ、あの女の子は?」

俺は変身する。

俺「私よ、私」

少しキモいがかわいこぶってみる。

フェ「あれ?目が赤くて、髪が白かったよっな?」

俺は変身を解き、吸血鬼化する。

俺「吸血鬼化で目が赤くなり牙が伸びる。変身魔法で髪を白くしてみた。」

フェ「吸血鬼化？」

俺「吸血鬼としての能力を引き出した状態だ。つまり、俺は吸血鬼だって言うこと。」

フェ「悠馬が吸血鬼なのはわかった。でも、さっきの変身に魔力を感じられなかったけどなぜ？」

俺「俺の能力に性別転換があるから」

フェ「信じられません」

俺「普通そうだよ。俺だって訳わかんねえよ。」

フェ「それより、ジュエルシードをこちらに渡してください。」

俺「やだよ、それに、フェイト、自分の置かれている状況が分かっているの？」

フェイトは周りを見る。知らない場所だろう。

フェイトはバルディシュを見る。バルディシュが壊れています。

フェイト絶望的状况。

俺「後、俺が封印したジュエルシードはなのはの足下に置いてきちゃったよ」

フェ「あの、ここどこですか？」

俺「町から外れたところの山の中」

フェ「熊とか出ませんよね」

俺「出るよ、でも、俺がいるから出ないかな？」

フェ「で、出るんですか？」

フェイトの涙眼はかわいいな。つい守りたくなっちゃうな。

フェ「わ、私どうしたら……」

俺「アルフさん呼んだら？」

フェ「さっきからやってるんですけどジャミングがかかっててできないんです。」

俺のせいだった！！！！！！！

俺「すいません、俺がジャミングしてました。」

フェ「だったら今すぐ切ってください。」

俺「無理、そこにあるデバイスが出し続けてます。」

なんかのいじめだと思えない。

俺はしゃがむフェイトに背を向ける。

俺「このデバイスを直す方法も壊す方法もないから、家までおぶるよ。」

フェ「いいよ、そこまでしなくても」

俺「遠慮しない。それに、俺がフェイトに怪我させたんだし」

フェ「いいよ、一人で歩けるよ。」

フェイトはそう言って歩こうとする。

フェ「うっ!」

フェイトは足を怪我していてうまく歩けず、膝をついた。

俺「友達に頼ることも大事だよ。フェイト」

フェイトは意地でも歩こうとするだろう。

俺はフェイトをお姫様だっこでかかえる。

フェ「へっ?悠馬、これ、恥ずかしいよ」

俺はフェイトを観察し

俺「俺はかわいいフェイトのかわいい一面を見れてうれしい」

フェイトは赤くなる。

俺はさつさと山を降り、フェイトから家を聞き出し、フェイトの家に向かう。

第09話「フェイトとの再会」(後書き)

作者「何この意味不明な展開」

私^が書いたはずだけど・・・本当に大丈夫か？

第10話「アルフは意外に強敵です」(前書き)

連続投稿。あっちもできたらいいのになあ・・・

第10話「アルフは意外に強敵です」

俺はフェイトをソファにおろす。

アル「フェイト！いる？」

アルフがいきなりドアを開けて入ってくる。
アルフは俺を見るなり、殺気を向けてくる。

アル「どうして貴様がここにいる！？」

アルフはキレている。

俺はどうしたらいいのでしょうか？

フェ「アルフ、ダメ！」

アル「悠馬、お前、フェイトに何をした？」

俺「何もしてない。フェイトが怪我をして倒れていたから家まで運んだだけだ」

アル「信じられるか？！」

アルフは俺に全力のパンチを放つ。

俺はとっさに吸血鬼化し、そのパンチを素手で受ける。

俺「おい、アルフ、俺が普通の人間だったら死んでたぞ！」

アルフとフェイトは俺がパンチを受けたことに驚いていた。

まあ、魔力で強化してないのに魔力の乗ったアルフのパンチを受けたら誰だってびっくりだろう。

アル「悠馬、お前人間じゃないのか!？」

俺「ああ、俺は吸血鬼だ」

アル「ならお前はフェイトに何の用がある!？」

俺「俺はフェイトの友達だ、友達を助けるのに理由がいるか？」

ほかにも理由はあるが

アル「なら、どうして私たちと友達になろうとした」

俺「俺はフェイトを見た時に誰かを守りたいという強い意志を感じたからだ」

嘘ですが。

アル「それじゃあ理由になってない!」

俺「わかってもらわなくてもいい。だが、俺はフェイトの力になりたい。だからこそ、俺は俺が予測した未来を変える。」

フェ「予測した未来？」

やべっ！口に出てました。今のところ俺の予想した未来に続いているので大丈夫だろう。

俺「俺の能力に少し先の未来が見えるものがある。俺は途中で傷つき、絶望するフェイトを見た。だから助けてい！」

アル「意味のわからないことを言うな！」

俺「いいから黙れ！」

俺は吸血鬼化した上でアルフに殺気をぶつけた。

アル「ぐっ！」

俺「お前にはわかるだろう。アルフ、俺に敵わないということが！」

アルフはそれでも俺に向かってこようとす。

俺「まあいい、俺を攻撃したらジュエルシードは手に入らないのだからな。」

アル「どういう意味だ！」

俺「俺にはかすかな魔力も察知できる。だから、今残っている残りのジュエルシードがどこにあるか分かっている。」

フェ・アル「!!！」

俺「海鳴にある残りのジュエルシードは三つで、海にあるのが六つだ」

アル「本当にジュエルシードのある場所がわかるのか？」

俺「あるのは海鳴市のはずれの旅館に一つと八束神社に二つある。」

あれ？何か忘れてる？

まあ気のせいでしょう。

アル「そこにあるのか？」

俺「あるけど、バルディッシュが壊れてるから無理！」

俺はなのはの足止めでもしますか。

フェ「そ、そうだった」

俺「俺は帰るけど、いろいろごめんね、俺も封印を焦ってたから。」

俺はそのまま帰る。

第10話「アルフは意外に強敵です」(後書き)

短いですね・・・

第11話「温泉はすばらしい」ヒロは無しで、」（前書き）

サブタイトルの意味は分からないけど、温泉は好きです。風呂が好きなんです。まだ二十歳の作者でした。

第11話「温泉はすばらしい<エロは無しで>」

週末に高町一家は温泉に行くらしい。いいなあ温泉……。

俺も行くか。

実は父さんと母さんが士郎さんに温泉に誘われたらしいが断ったそうだ。

俺は二人に温泉に行きたいと言ったところ。

高町さんにOKをもらったらしく。

俺も行くことになった。

俺はなのは達にはぶられてる？並に恭也さん達の乗る車の中で身を小さくしてました。

俺は温泉に着くと自分の荷物を持ち、部屋に置くと、なのは達が温泉に行くところだったので、淫獣を奪い取る。

俺「ユーノを俺に貸してくれ！」

アリサ・なのははえーっという目線を向けてきたが、ユーノにいい思いはさせない。

俺「俺がきちんとユーノを洗う！」

という一言でなんとかなった。

そして俺は風呂に入った。

俺はユーノをお湯の入った洗面器に入れ

あとは放置。

ユーノは一応人間なのでどうにかかります。たぶん。

俺は体を洗う。

俺は温泉に入る

俺「はー、このために生きてるって感じ！」

と叫んでしまった。

恭「おまえはいくつだ。」

と恭也さんに言われてしまった。

俺「うーん、32歳？」

恭「嘘をつけ、嘘を」

まあ、前世でも高校の時に言われましたけどね
ぶつちやけ俺は温泉大好きです。

俺「すいません、9歳です。」

士「ははは、悠馬君も恭也といい勝負だとわな。」

まあ、俺は転生してから士郎さんとはかなり知り合いなので俺のこ
と知ってるけどね

恭也さんは知りません、だって会うの二年くらい前からですもん。

俺「温泉は日本の最高の文化です！」

俺は早々と風呂からあがり、水を飲む。

牛乳は嫌いです。特に何かと混ぜたものは特に。

着替えているとユーノが脱衣所に入ってくる。

放置してたの忘れてた！？着替え終わらせる。

俺はユーノをとつかみタオルで拭き、俺の肩に乗せる。

俺は卓球台のところで休む。
アリサが来る前にMYラケットを持ってきておこう。
俺は部屋に戻りMYラケットを持って来て待機する。
三十分してからなのはたちがきた。

俺「アリサ、いざ勝負！」

アリ「いいわねえ、叩き潰してくれろわ」

俺はアリサにMYラケット2を渡し、勝負をする。
なのはは唾然としていた。
すずかにはクスクスと笑ってその試合を見ていた。
20-19<俺VSアリサ>
余裕なんだがあえての勝負。
つまり盛り上げるための演技。
まあ、アリサも強いけどね。
俺は最後にスマッシュと見せかけた右スピンの。

俺WIN

アリサ「すずか、仇を〜」

すずか「わかった、頑張るよ」

かわいいがそんなことを言っているのかな？
俺も吸血鬼ですぜ。

そのあと、俺WIN、すずかLOST
やべっ！熱くなりすぎて一回神速つかちゃった。

俺「すずか、お前強いな〜」

「さすが「そんなことないよ」

アリ「さすがが負けるなんて。リベンジ！」

俺はその後適当に手を抜き（疲れたふり）して勝率を徐々に下げていきました。

しばらくして腹がすいたので夕食にするために食堂に向かったところ。

アルフがいました。

アルフは俺をみて驚いていましたが、それよりなのは見て原作道理の会話。

俺「何話してたんだ。今月の株価の動きか？」

なのは「へっ！？そ、そんなところだよ」

その誤魔化し方はどうだと思っよ。

アリサも食いつくな。

俺「明日辺りに　鋼鉄の株価が下がるから気をつけた方がいいよ」

と告げておいた。マジな話だが。

なの「うん、わかった。」

と絶対わかってないよなあと思われる返事をしていた。

まあ、俺が株で儲けているのは内緒だけだな。

第11話「温泉はすばらしい」ヒロは無事で」(後書き)

もう自分が訳わかめ!!!

後書きも訳が分からなくなってきました。

第12話「久遠襲来」(前書き)

サブタイトルがネタバレ

第12話「久遠襲来」

なのはとフェイトが戦って一週間フェイトとアルフはジュエルシードを探している。

俺はいつもと変わらず、朝に鍛練、夜に鍛練と御神の鍛練を怠らず。最近になってやっと気の使い方がわかってきました。気配を消すのは簡単なのになあ。

土曜日に八束神社に行くと久遠がいた。

俺が忘れてたのはこれか〜!!!

あれ？久遠その足元にあるのは何？

久遠「くお〜ん」

ジュエルシード発動

しかも二つ離れたところにあつたジュエルシードも発動し、久遠の中にある九尾が出てくる。

やばっ！

俺は吸血鬼化し、九尾に吹き飛ばされる。

なぜか那美さんがいないので俺は結界を張り、九尾が逃げ出さないように戦闘態勢をとることにする。

俺「くっ、アーク、セットアップ」

スタンバイ、いつでもいけます、マイマスター

日本語で返してくれる。アーク、ありがたい。

バリアジャケット装着し、アーク<小太刀>を構える。

俺は構えると九尾に向かい剣を振る。

はやい！とにかく九尾はめちゃくちゃに動きが早い！

それに九尾の尻尾は3本は防御に残りは攻撃だが3本は接近戦向きに先が硬く、3本は硬くない代わりに伸びるし再生もはやい。

一人では無理だ。

それにずっと吸血鬼したままなのはいい、だが、なぜ、その状態で防御を貫けない。

このまま戦闘をするのは無理だ。

もう一段階するか？

そんなことを考えているとなのはが来る。

なの「デイバイン、バスター！！」

桃色の閃光が九尾を襲う。

俺「隙を見せるな、なのは！」

なの「ゆ、悠馬君」

俺「ちっ！」

俺はなのはに飛びつきなのはを突き飛ばす。

なのはのいたところに雷光が襲う。

俺は自分を下敷きになのはを地面まで落とす。

俺「気を抜くな！死ぬぞ！」

くそっ！

九尾が強いのは知っている。

他のSSのように大きければ楽なのだが、九尾は虎くらいの大きさしかないため、とらえづらい。

なの「悠馬君だよね？」

俺「ああ、そうだが、俺が魔法を使えるなど思ってもみなかったんだろう？」

なの「うん、じゃあ、悠馬君は吸血鬼なの？」

俺「ああ、だがその他の質問には答える時間はなさそうだ。ちっ！」

俺は九尾に向かい走り出す。

九尾がなぜさつきから俺に雷を使わないのは謎だ。気付いているのか？

いや、そんなはずはない。

九尾「ガオーン」

ライオンかお前は！？

ん？そういえば咸卦法をやってみるか？

前にネギま！の高畑のように試した時にできず、右手と左手を入れ替えてやってみたらできましたということがありました。

俺「右手に魔力、左手に気を・・・合成！！咸卦法！！」

咸卦法！魔力と気の本来混じらない融合よって生み出される力！すごい力が俺からあふれ出ます。

右手に集中させ、九尾にぶつける。

俺「くらえ！」

だが予想とは違い避けられる。

俺「ツインドライブは伊達じゃないか!？」

ジュエルシード二個+久遠は強い。畜生が!

フェ「ハーケンセイバー」

ハーケンセイバーが九尾を襲う。

九尾はそれを避けようとせず。歯で食い止める。

フェ「えっ!？」

ハーケンセイバーが碎かれる。

フェ「嘘?そんな!？」

ちっ!これが狙いか!

俺はフェイトをなのは時のように吹き飛ばし。俺は下敷きになり、フェイトと地面におちる。俺がフェイトを突き飛ばした次の瞬間にフェイトがいたところに雷光が落ちる。

なの「デイバイン、バスター」

九尾はかわす。

俺「すまない、フェイト、だが油断するな。」

フェ「うん、ありがとう」

俺はフェイトから離れる。

俺は更に吸血鬼化し、二段階目の吸血鬼化により赤い眼が金色になり、髪が白くなる。

俺は九尾に剣を向ける。九尾が急に遅くなったような感覚になる。最初に切った時は一本しかつら向けなかった防御用の尻尾も咸卦法で2本、更に吸血鬼化したことで三本を貫くようになり九尾に焦りが見えてきた。防御するのに攻撃用のしっぽまで使うようになってきたのだ。

フェュプラズマランサー、ファイヤー」

なの「アクセルシューター」

どうやら二人は手数勝負に出るようだ。

俺は少し休み、九尾に向かう。アークに気と魔力を纏わせ。

俺「くらえ!」

俺は九尾に剣を振る。

神速!!!

貫

六回の斬撃をくらわせる。

俺「ハア、ハア、ハア。ジュエルシード封印!」

俺はジュエルシードを二個封印する。

だが、九尾はそれでは納まらず俺の左腕を噛みちぎり、納まった。

俺「ぐつ!」

なの「悠馬君!？」

フエ「悠馬!？」

俺と久遠はその場に倒れた。

第12話「久遠襲来」(後書き)

久遠・・・

分かる人いますか？

第13話「真実に辿り着くすずか」(前書き)

連続投稿。できる人はすごい。私には無理です。

第13話「真実に辿り着くはずか」

俺は倒れはしたものの意識はあった。

俺「なのは、救急車を呼ぶな！」

なの「で、でも、腕が取れてるんだよ!!!」

俺「大丈夫だ、土郎さんに連絡する。」

俺は右手で携帯を取り出し、土郎さんに連絡した後、月村家に電話する。

ノエルさんが出てくれた。

俺「すいません、佐々木悠馬です。忍さんいますか？」

ノエル「はい、少々お待ちください。」

少しすると忍さんが出てくる。

忍「はい、はい、悠馬君？すずかに用じゃないの？」

俺「すいません、今まで黙っていたんですけど、俺、吸血鬼なんです、今、腕をもがれたので、血を分けてもらえませんか？」

忍「は、はい？吸血鬼？悪い冗談でしょ？」

俺「本当です、今から行くので土郎さんに詳しく聞いてください。」

俺は電話を切り、転移魔法で月村邸の玄関に転移する。
俺は呼び鈴を鳴らすとノエルさんが出てくれる。

俺「すいません、中に入れてもらえますか？」

ノエル「今さっき士郎さんから連絡がありました。どうぞ中にお入りください。」

俺「すいません」

俺が中に入り、ソファーに腰掛けると忍さんとすずかがこちらに来る。

忍「士郎さんから聞いたわ、あなたも夜の一族だって」

俺「少し違うけど、俺が吸血鬼なのは本当です。」

忍「なんで、私たちが夜の一族だって知ったの？私はそこが気になるわ」

でしょうね。

俺「俺はあなたたちが夜の一族だと知ってましたよ。」

忍「あなたの目的は何なの？」

俺「平和を守りたい一人の吸血鬼な魔導士です。」

俺、疲れてきました。

忍「魔導士？」

俺「後で説明しますから、輸血パックを三つほど分けてください！」

再生してきてる。

やばい、血が足りない。

忍「わかったわ、ファンリンお願い。」

ファンリンが俺に輸血パックをくれる。

俺はそれを飲み干す。

俺「ふう、助かりました。ありがとうございます」

三つの輸血パックを飲み干すと腕が高速に再生される。

肩は動く、腕まだ神経がつかっていないために動かない。

俺「さすが、隠しててごめん・・・」

すず「ううん、私もみんなに知られたくなかったし、悠馬君が夜の

一族だったのは驚きだったけどうれしいよ」

それはフラグか？

いや、ないだろう。

俺「すまない、少し横にならせてくれ」

俺はソファーに横になった。

俺は起きると夜7時だった。六時間寝てました。

腕の感覚は戻ってきている。

俺の上にすずかが眠っていた。

近くにいたノエルさんが俺が起きた確認し忍さんのところに行った。

俺「すずか、起きてくれないか？」

俺はすずかを揺する。

すずかはすぐに起きてくれた。

俺「おはよう、すずか、ずっとそばにいてくれたのですか？」

すず「う、うん／＼、寝ちゃったけどね。」

俺「気持ちだけで十分です。ありがとうございます。すずか。」

微笑む。間違っていないよね。

すずか赤くなった？

わからない

忍「さて、話をしましょうか、悠馬君。」

俺「はい、質問にはなんでもこたえますよ。」

忍「まず、魔導士って何？」

やっぱりそこか

俺「魔法使いみたいなものです。今、魔法の種類を説明しながら実演しますね。」

魔砲使いのなのはさんは魔法少女ですが……

俺の使える魔法は、砲撃、射撃、変身、高速移動、姿消失、バリア、バインドくらい。

忍「魔法って誰でも覚えればできるの？」

俺「無理です。なのはとか、リンカーコアと呼ばれる魔力を持った器官がないと無理です。あと保有してる魔力の大きさとかも関係しますが」

忍「じゃあ、その魔力をどこから持ってこれれば魔法は使えるの？」

俺「はい、空気中にも魔力はありますし、できるかもしれません。」

忍「あと、そのデバイスっていう魔法使いの杖みたいなものの研究もさせてくれる？」

俺「データは家にあるのでそれを持ってきましょう。ストレージデバイスならあげますよ。」

忍「ストレージデバイスって？」

俺「デバイスって言うのは例えるならPCで魔法がプログラムです。魔法の発動に欠かせないわけではありませんが。使った方が早いです。ストレージデバイスとはAIが入ってないものをいい、インターネットデバイスにはAIが搭載されていてとても人間らしいで

す

忍「インテリジェントデバイスかー興味あるわね。」

俺「しばらくしたらあげますよ。高いですけど、助けてもらいましたし。」

忍「あら、いいの?」

俺「ちなみに今の日本円でこのくらい。」

紙に書いて渡す。

忍「たかいわね、大丈夫?」

俺「日本円なら俺の総資産がこれくらいあります。」

見せてびっくりな総額

忍「本当?嘘でしょ?あなた個人で?」

俺「はい、BWって俺が作ったんですよ。」

ちなみに月村家の総資産に全然及ばないことは追記する。
BWは壊れた過去からとっているが、表では、ブラックウィンドと
なっている。

忍「あの機器類のOSの?」

俺「はい」

忍「まあ、いいわ、まだまだ聞きたいことはいっぱいあるから。まず、すずかにそれをゆずるわ」

俺「すいません、まだ病み上がりで栄養が足りないのご飯をもらえますか？」

忍「ええ、いいわよ、ノエル、何か悠馬君に食べ物を出して。」

ノエル「わかりました」

俺「じゃあ、食べ物が来るまで話を続けましょう」

俺はすずかを見る

俺「何か聞きたいことはありますか？すずか？」

すず「あの、悠馬君の家には輸血パックはなかったの？」

俺「あゝそれね。俺は血を飲まなくても全然平気だから、そんなの用意してないだけ。」

すず「じゃあ、今日まで血を飲んだことないの？」

俺「他人の血を飲んだことはない。自分の血を味わうようなことは多々あったが。」

すず「私のこと化けものだって思う？」

少し空気が凍りました

俺「全然！むしろ俺の方が化け物だろ」

すず「えっ！？なんで、生きるために血を飲まなきゃいけないのに……」

俺「俺だって飯は食うんだよ。血だって一緒だよ。それにホントの化け物は息をするのと同じくらい当たり前に殺す奴のことをいうんだよ」

すず「でも！」

俺「はあ、自分が化け物だと言われたり恐れられるのが怖いんだろ？だけどさ、すずかは死んだら生き返らない。それは人間と少しも変わらない。むしろただの人間より身体的能力のある人間だよ。俺は違う、普通には死ねない。」

すず「どういふこと？」

俺「多少時間はかかるが多少の脳の傷があっただけで死んだ場合でも生き返ってしまうという事。」

忍「まじ？」

俺「まじです。やったことないからわからないけど、まじです。俺を吸血鬼にしているVウイルスを調べた結果なので間違いないです。」

すず「Vウイルス？」

俺「Vウイルスとは、俺の体内にある吸血鬼の素みたいなので、血液感染しかせず、うつると厄介な病気です。」

忍「巻族にでもなるの?」

俺「はい、しかもこのウイルスは俺の体内でしか増殖しないので、俺からのウイルスの供給が必要です。ちなみに血液感染と言ってもエイズより感染力は弱いですけどね。」

忍「面白いわね。ちなみに巻族になっても手に入るメリットは何?」

俺「不老不死です。もちろん、脳さえ傷つけられなきゃ復活はします。俺より再生は遅いですけど。」

すず「それって、危ないんじゃない?」

俺「俺のウイルスの供給なしじゃ生きられないのに?」

すず「なるほど……」

忍「あなたの血液も調べさせてくれる?」

俺「いいですよ。それで何かがわかるなら。」

忍「なんか輸血パックだけじゃ釣り合わなくなってない?」

俺「別にいいですよ。俺は再生のために血をもらったおかげで、今、話をしているんですから」

忍「じゃあ、すずかをあげるわ」

すず「お姉ちゃん／＼／＼」

俺「それじゃあ、俺がもらったものが大きすぎますよ。って、本人の確認もなしに勝手に人をあげないでください。」

忍「ナイスノリッツコミ！」

忍さんがサムズアップ！

ノリいいな。ってというか俺を信用しすぎだと思う。涼の時に何かやったか？

忍「ところで、何に腕をとられたの？」

俺「久遠から出た九尾に食われました（笑）」

忍「（笑）って。ところで九尾って何？」

俺「久遠に封印された妖怪？」

忍「知らないの？」

俺「はい、久遠は知ってますけどね。九尾については名前しか知りません。詳しくは那美さんに聞いてください。」

ノエル「すいません、夕御飯の用意ができました。」

忍「ありがとう、じゃあ、悠馬君。食事の後に話を続けましょうか」

俺はその日泊まり込みでいろいろな説明をした。かなり疲れたことは
もういいから話す。

第13話「真実に辿り着くはずか」(後書き)

こっちの話もあっちの神と悪魔のパシリ?のシイルもドラ リウス
というPCゲームの設定を使っています。興味のある方は調べてく
ださい。ちなみにそのゲームのVウイルスをそのまま使っているわ
けではありません。

第14話「管理局遅いなあ」（前書き）

短いです。

第14話「管理局遅いなあ」

月村邸から出て俺は海にやってきた。広域結界を張り、海上を飛ぶ。

俺「さーて、いきますか。」

俺は小太刀を二本構え広域砲撃をする。

俺「はあく。ザンダーブラスター（散）」

広域に電撃が飛び散り、ジュエルシードが六つ発動する。

俺は発動した竜巻にそれぞれにカードを投げる。

なのはとフェイトが来るが遅い。六つのジュエルシードを回収する。

フェイト「それをこっちに渡してください。」

俺「嫌です。」

フェ「それなら、あなたを倒します。」

俺「どうぞ、勝手にしてみてください。なんならなのはも手伝って

いいよ。」

なの「ええ!?!」

俺「だって、魔力の残りもまだまだあるし……」

俺は今いる場所から急いで離れる。

青色の閃光が俺のいた場所を襲う。

クロ「ストップだ」

俺「ちっ！遅いんだよ、おめえ」

俺はクロノを蹴る。

クロ「おい、僕は時空管理局の者なんだぞ、何をするんだ」

俺「ジュエルシードの暴走から二週間もたってから現れやがって、遅いんだよ管理局！」

クロ「何！？僕たちだっているいろあつたんだよ！！」

俺「だからって二週間はかかりすぎだ！お前じゃ話にならん上のものを呼べ！」

クロ「何！？」

いきなりリンディさんの顔が映った画面が出てくる。

リンディ「すいません、こちらにも事情があつて……」

俺「いいよ、まず、その黒いの。フェイトを捕らえてから話をしよう。」

俺はフェイトにバインドをかける。ついでに鋼糸も巻きつける。

俺「フェイト、まず話し合おう。」

アルフも来る

アル「この〜！」

アルフの全力パンチ、俺は回避後バインド&鋼糸<チタン合金製>でぐるぐる巻きにする。

アル「てめえー何をする!?!」

俺「話をしたいだけだ。」

んっ!?!?

突然雷光が俺とフェイト、アルフのいる場所に落ちる。

俺「ぐっ!?!」

俺はフェイト・アルフを庇い、雷光を受け止める。

俺「ぐっ……………」

俺は強烈な電撃を受け気を失う。

その後、何があったかは知らない。

第14話「管理局遅いなあ」（後書き）

書き直す気はないですね・・・

第15話「プレシア襲来」(前書き)

連続投稿はまだ続きますよ。

あっちは上がっているころには更新できているかな？

第15話「プレシア襲来」

俺はプレシアの魔法によって気絶したフリをしている。

俺は起きたらベットに横たわっていた。まあ、正確に言えば運ばれた。

やはり、さっき封印したジュエルシードがない。

俺は起き上がり、なのはとフェイトの気配のする方に行く。

プレ「私はアルハザードへ行くの！」

ああ、このシーンですか……

俺「アルハザードへの行き方をしているのは俺だけだ！行ってどうする気だ!？」

俺の登場に周りの人は驚く。

リン「あなた、アルハザードを知っているの？」

俺「ああ、知っているよ、座標まではつきりとな」

プレ「そんな戯言を。」

俺「じゃあさ、アルハザードには人を生き返らす技術はないと言ったら？」

プレ「そんな戯言を信じるとでも？」

俺「ふっ、じゃあ、俺が人を生き返らす方法を知ってるとしたら？」

周りの人達「!!!!!!」

プレシアも驚いていた。

俺「話が途中からしか聞いてなかったけど、フェイトにクローンだつてことは言った?」

クロ「ど、どこでその話を?」

俺はフェイトを見る。

聞いたのか・・・とりあえず・・・

俺「おい、フェイト、自分だけが不幸だなんて思っちなよ!」

俺はフェイトを揺する。

クロ「おい、こんな状態なのに刺激するなよ。」

俺「フェイト、甘つたれるな、この海鳴にはな、クローンで生まれただ奴が二人はいるんだぞ、しかも、もつとお前より過酷な人生を送ってきたんだ。ここで、現実を否定するな!」

みんな驚き顔で面白い。フィリスさんがいたからリスティさんもあるよね。リスティさんもほとんど生まれは同じだし。

静馬さん(父さん)もクローン人間<魂は本物>だし、三人は強く生きてますよ。

フェ「だって、わ、私、人間じゃないんだよ」

俺「俺の方が人間じゃないよ！」

げし、と突く。

フェ「い、痛いよ〜」

俺「フェイトには心がある。だからお前は人間だ。」

フェ「だ、だつて〜」

フェイトは思いっきり泣いています。

俺「フェイトが望むなら、俺が養ってあげるから。」

フェ「本当？」

俺「まじ、俺、フェイトの友達だもの助けなきゃいけないからな。」

まあ、ある意味告白だが気にしない。フェイトかわいいもん、娘に欲しいくらいだもん。

俺はフェイトに笑みをみせる。友達を養う奴などほとんどいないがな。

プレ「よかったわね、フェイト、新しい持ち主が見つかった〜」

俺はプレシアに向かい二段階の吸血鬼化をし、あふれんばかりの殺気を向ける。

俺「それが、親の言うことかー！！今からそっちに向かうからな！覚悟しとけよ。」

俺は殺気を消し、クロノに向かって言う。

俺「おい、プレシアを潰しに行く。どこに奴がいる。」

クロ「い、今から向かいますから、お、落ち着いてください」

俺はキレています。

俺「フェイト、お前も行くんだ。例えまた傷つくことになるうともな。」

フェ「ありがとう、悠馬……」

なぜか俺とフェイトが見つめあう。
何故？

なの「あの〜、私もフェイトちゃんとお友達になりたいのですが？」

俺「あつ！忘れてた！」

このKY感に俺は吸血鬼化が解ける。

なの「私を忘れるなんてひどいの！」

なの「はが怒ってます。かわいいです。」

フェ「あ、あの、私、クローンなんだけど友達になってくれるの？」

俺「はあ〜、もういい加減それを引きずるのやめてくんない？俺の

テンション下がるし、俺の方が人間から遙かに離れてますよ。クローンなんて、つま先の爪くらいしか人間から外れてないよ……。」

落ち込んだフリをします。

フェ「ご、ごめん、悠馬、そんな気で言ったんじゃないよ。悠馬は人間だよ。」

俺「はあ、どうせ、俺なんか……。」

演技でフェイトをいじる。

誰かの名言。

落ち込んだ奴に、慰めの言葉は要らない。もっと自分の方が落ち込んでやる方がいい。

第15話「プレシア襲来」(後書き)

コメント来てるかな？

と投稿してもいないのに考える作者です。

批判が無いといいな・・・

第16話「アリシマはココにいる。」（前書き）

チート乙

第16話「アリシアはここにいる。」

俺となのは、フェイト、アルフ、クロノ、ユーノはプレシアのいる時の庭園に来た。

俺「俺はここら辺の破壊を行いながらプレシアのもとに向かう。クロノとフェレットもどきはここの動力を破壊してくれ！」

クロ「わかった！」

ユー「わかった、って、君も僕のことをそういうのか!!」

ユーノが怒っていますが無視!

俺「なのは、フェイト、アルフ、遅れるなよ！」

俺はゴーレムを切り刻みながら駆けていく。途中で離れたところから撃ってくる敵もいたので、そいつらに魔力弾をぶつける。最低限の力で動力や制御装置を壊す。

なの「悠馬君、早すぎだよ。」

俺「これくらいスピードについてこれなくてどうする。頑張れなのは、第一、まだ御神流を使ってないぞ。」

なの「へっ!?!」

俺「御神の剣士はこれくらいできなかつたら破門されるぞ!」

なの「お兄ちゃんたちもこんなことできるの!？」

できるだろう。恭也さんと静馬さん、美沙斗さんなら簡単に出来ちゃいそうで怖い。

俺「ああ、俺は射撃にしか魔法使ってないし。」

なの・フェ・アル「「ええっ!？」」「」

だろうな、驚くよなあ」

俺「ちなみに、吸血鬼の力のせいじゃないからな。」

俺はまだ吸血鬼化を使っていない。

俺は走る。ただただ気配のある方へ。

強そうなゴーレム発見!!

原作でなのはさんが苦労してたけど俺ならどうだ!？

俺「エリア・ブレイク!!」

俺は小太刀に魔力を込め、小太刀が大剣に変わる。

俺「貫け!!!!」

俺はゴーレムを切ると魔力刃のみが突き刺さったままになる。

俺「ブレイク!」

俺の言葉とともに魔力刃が爆発する。

俺は小太刀を納刀する。

俺は体の前に腕をクロスさせる。
クロスさせた腕の前に小さな魔力の塊ができ、魔力の密度を上げていく。

俺「コスモ、ノヴァ（最弱）」

ゴーレム全てが吹き飛ばされる。

俺「ふう、おーわり」

俺はプレシアのいる部屋の扉を見つける。

俺「サンダーバスター（弱）」

俺は扉を壊し中に入るとプレシアがいた。
あと、アリシアも生体ポッドに入っていた。
俺はアリシアを見た瞬間にアリシアの体が光る。

俺「ぐっ！」

俺は急に目の前が真っ白になり、倒れてしまう。

なの「ゆ、悠馬君!？」

フェ「悠馬!?!」

俺が目を覚ますとそこははるかに広い平野だった。

アリシア「お兄ちゃん、起きて、起きてよ」

俺「んっ？ここはどこだ？」

金髪の少女が俺の寝ているところの横に座っている。

俺は芝生の上に寝転がっている。

俺はフェイトに似た子に話しかける。たぶんアリシアだろう。

アリシア「ここはあなたの夢の中の世界だよ。」

俺「俺は、プレシアと闘っていたはずじゃあ？」

アリシアは俺に向かって笑みをくれる。

アリシア「私は、お母さんのしたことはよく見てた……」

俺「なら、なぜ俺に話しかける？」

アリシア「あなたなら、お母さんを……、私を救えるはずだから……」

俺「俺にお前を生き返させるといいたいのか？」

嫌ではない、だが、それを短時間に、アリシアを救う方法……

俺「お前に覚悟はあるのか？人間を外れる覚悟が……」

アリシア「あるよ、それが、お母さんを救う方法だから……」

覚悟をした目をしている。年相応ではないな。

俺「わかった、その覚悟。後戻りはできないからな……」

俺は横になり眠りにつく。風が心地いい。

俺「俺は、お前を見くびっていたよ。アリシア」

俺は倒れていたところから起きだす。

俺「おい、プレシア、アリシアを復活させてやる。」

プレ「何!?!」

俺は吸血鬼化をし、目をつぶり、目をあける。開けた瞬間にもう世界に色はなく。モノクロの世界……。神速ではないけどね。

俺はアリシアの入った生体ポッドに向けて切る。もちろん、アリシアを切らずに。

プレ「よくもアリシアを……!」

俺は俺自身の腕を傷つけ血を流し、その血をアリシアに飲ませる。

俺は生の魔導書を取り出し、その中にあるアリシアの魂をアリシアの体に入れるために転生刀でアリシアを刺す。

プレ「よくもアリシアをー!!」

プレシアは魔法を俺にぶつける。

だが、俺には届かない。

まず、俺の張ったシールドに阻まれ、なのはとフェイトがシールド張り守ってくれる。

あれ？なのはさん何をやってるの？

なの「スターライトーレイカーー」

生でなのはのスターライトブレイカーを見ました。ありえねえ砲撃だ。

なのはのスターライトブレイカーがプレシアを襲う。

プレシアは防御する。

防ぎ切りやがったー。って当り前か・・・。

アリシア「んっ!?!お兄ちゃん?」

俺「ふう、蘇生完了と。」

刺さっていた転生刀がアリシアから消える。

ここにいるすべての人が驚く。

俺はアリシアに俺のコート羽織らせる。

アリシア「ありがとう、お兄ちゃん、いいえ、ご主人さま!」

なの・フェ「ええっ!?!?」

なのはとフェイトの驚いた顔が面白かったが・・・

俺「はあ、そんなことより、空気を読め！」

俺はため息をつきながらそう言う。

アリシア「そ、そうだった！お母さん、こんなことやめてよ！フェイトだってお母さんの子供じゃない！どうしてこんなことするの？」

プレシア「ああ、アリシア、生き返ったの？こっちに来なさい。そんな人たちのところにいちやダメよ」

プレシアはアリシアに優しい声で呼びかける。アリシアは横に顔を振る。

アリシア「お母さん、私はずっと見ていた、お母さんのしてきたことを、フェイトにしてきたことを！反省してよ、お母さん！」

プレシア「アリシア……」

俺「やはり、精神と体が侵されているな」

アリシア「なんとかできる？」

俺「お前次第だろう。プレシア、最後の質問だ、フェイトを自分の子として認めるか？」

この質問の回答ですべてを決めるか・・・

プレシア「何を言っているの？私の子供はアリシア唯一人よ。」

俺「腐っているな。お前の腐ったものを修復してやる。アリシア、これを使え！」

俺はアリシアにデバイス・永遠<トワ>と渡す。

アリシア「私、魔法使えないよ。」

俺は更に、ジュエルシード<カードに封印したもの>と丸い白く光る物の書かれたカードを懐からとりだし、アリシアの胸に置くとアリシアに溶けていく

俺「これで使えるはずだ。解凍・トワ」

トワ<スタンバイ・レディ、セット・アップ>

アリシアに魔力が流れる。黄色だな。

アリシア「た、立てる！」

身体強化。それを使ったようだ。

俺「ジュエルシード封印」

懐から取り出したカードを投げる。

プレシアは勿論それを阻むが無駄である。

ワームホールが開き、それに吸い込まれる。

そして、封印、そして俺のもとに飛んでくる。

俺「全封印完了」

プレシア「チツ！でも、もうそれは要らないわ。アリシア、こっちに来なさい。そんな奴らと一緒にいちゃダメよ。」

<魔力・解放・サンダーフラッシュ>

アリシア「お母さん、目を覚まして!!」

電撃がプレシアを襲う。

プレシアは防御するも防ぎ切れなかった。

俺は倒れたプレシアのもとに歩いて行く

俺「これで終わりだ」

フェイト「何をするの？悠馬」

俺は久しぶりに時の杖を出し、プレシアに狙いを定める。

俺「別に殺したりはし無さ、信じてくれ」

フェイト「わ、分かったよ」

俺の周りにジュエルシードのアリシアに溶かした分を除く<16個>がカードに封印されたまま、浮かす。

俺は時間逆行魔法をプレシアに行うために、記憶の複写、時間逆行（対象物のみ）を行う。

大体、見た目が5歳くらいになったところで時間逆行を止める。

その瞬間にジュエルシードのカードが砕け、燃える。何も残さずにもちろん幻影ですが……

そして、記憶をもとにもどす

俺「これで、終わりだー」

テ<Hyper Clock Over>

おい、カブトかよ

いつHyper Clock Upしたんだよ。

テ<ジョークですよ>

俺「ジョークかよ、Hyper Clock Upできないのかよ。

」

テ<できますよ!>

俺「まじ!?!」

テ<まじです!>

なの「悠馬君、さっきから何でデバイスと話してるの?」

フェ「ねえ、悠馬、なんで母さんが若くなってるの!?!」

俺「いや、こいつがツツコミどころ満載のこと言いやがったからだ。あと、プレシアは時間を逆行させ、体と精神が正常な状態に戻しただけだ。疲れたからあとはよろしくな」

俺は欠伸をし、俺はそこら辺で横になり眠りにつく。

第16話「アリシアはここにいる。」（後書き）

シイルもテジャスを使っていますが、ほとんど同じなチートデバイスです。

第17話「これが本当の名前を呼んでの儀式……」(前書き)

特殊召喚されるのは冥王なのは

第17話「これが本当の名前を呼んでの儀式……」

俺は起きるとベットに寝ていた。

これは……

俺の横になぜかアリシアがいる

俺「何故？ Why？」

アリシアは心地よさそうに寝ています。

あれ？なんで？一応アリシアはフェイトの服を着ています。
たぶん、庭園から持ってきたのでしょう。

なぜか、この部屋に誰もいない。

俺は起き上がろうとするが、俺に巻きつくかの如く、アリシアが俺を放さない。

俺「ふう、アリシア、起きているのだろうか？」

アリシア「ばれた？」

俺「当たり前だ。それより、みんなはどうなった？」

アリシアは簡単に俺が寝てからのことを話してくれた。

アリシア「あ、あのね、私、吸血鬼になったんだけど……」

俺「あゝ、そうだった。」

まずは充電か……

俺はアリシアの顔を抑え、キスをする。しかもディープに

アリシア「ふっ、ふえっ!？」

驚いてる。かわいいなあ、キスくらいで、俺はアリシアに唾液を飲ませる。

まあ、こんななりだし、性的興奮はこないわなあ。ありがたいです。俺にロリコンの趣味はない。

俺「ふう、終わりっ」と

アリシア「えっ!？もっど、もっど。」

俺「これ以上、餌をあたえたら頭がパーになるからダメ!」

ちなみにこの部屋に監視カメラが仕掛けられているのは知っていませんし、これを見るだろうエイミーさんの近くにリンディさんの気配があります。クロノはいない。クロノとなのは達とプレシアは事情聴取のようだ。

俺「さて、見ているんですよね、リンディさん、エイミーさん、ちよっとこっちに来てもらえませんか？」

リンディさんとエイミーさんは驚いているようだがきちんとこっちに来た。

さてと、俺の事情聴取か。めんどいよ。

しばらくすると、リンディさんとエイミーさんが部屋に入ってくる。

俺「すみません、お茶は出せませんが、ゆっくりしてください。」

リン「いいわよ、それにお茶を出すのはこっちの方だし。」

俺「聞きたいのは俺とアリシアのこととアルハザードのことですか？」

リン「はい、そうですね、それについて話してほしいわ。あと、ジユエルシードとプレシア・テスタロッツサについても」

俺「はあ、話したくないんだけどなあ。まあ、いいや。俺は真祖の吸血鬼を超えた吸血鬼でこの世界にも吸血鬼はいるけど、俺とは全く違う吸血鬼だった。俺は異世界からきたらしいというかたぶん、そして、アリシアは俺の血を受け、真祖に限りなく近い吸血鬼になったはずだけど。全然ダメ吸血鬼だ。だから俺からのウイルスの供給が必要なんだ。さっきのはそれだ。まあ、体液なら何でもいいんだけどな。」

リンディさんとエイミィさんはわかったらしく、顔が赤い。

俺「ふ〜ん、何を考えたのかなあ？聞きたいなあ？」

ますます二人の顔が赤くなる。

俺「まあ、冗談はさておいて、吸血鬼については後でレポートにして提出します。かなり、長い話になるので置いておきます。アルハザードについてですが、行きますか？アルハザード？」

リン「本当にあるの？」

俺「できれば行きたくないし、これもレポートで提出しますね。まあ、簡単にいえば、虚空空間にある。知的探求者たちの世界といえはわかりますね。」

エイ「それって……」

俺「まさに想像道理のものです。俺はそこに行き、少し研究を見てくださいました。もちろん対価に俺の血をおいてきましたよ。」

リン「それじゃあ、そこであなたの研究をしているのね、私たちが襲うことはないの？」

俺「ありえませんが、なぜなら、彼らはただの知的探求者で、その次元が俺以外に通れないくらい複雑なので無理です。」

リン「さっぱりだわ、それでも何故彼らはそこに籠っているのかしら？」

俺「人間の復活と永遠の命の研究は難しいらしくその研究を止め、新たな研究を始めるものが多い、だいたい研究しているのは人の心だったな。そういえば、デバイスに疑似リンカーコアを入れる研究やリンカーコアの改造は研究として完成していたなあ」

リン「そ、そんなことが……」

俺「虚空世界の研究所と言ってもまったくの異質なものだ、研究所は狭いのに世界がやたら広くて、研究所の外は地球と同じようなものだったからな。まあ、あとで説明するから」

エイ「知りたいことが多すぎて何がんだか」

リン「そうねえ……」

俺「俺の魔力値についても知りたいんじゃないですか？」

リン「そうねえ、普段は一般人くらいにしか見えないし、今までの戦いの中だってAクラスの魔力しか感知されて無いものね。」

俺「俺の魔力値は一億、そして魔力出力も最大一億。」

一億なんて嘘、もっとあります。一人で、闇の書を完成できます。

エイ「嘘でしょ？そんな量の魔力を人が持ち得るわけないよ。」

俺「人ならね。」

俺の一言に二人は気付く。

俺「あと、プレシアは五歳くらいの肉体まで時間逆行させました。ジュエルシードはその時とアリシアに使ったのもうないです。」

リン「そのようですねところで時間逆行とはもつできないんですか？」

ですよねえ、気になりますよねえ。

俺「可能は可能ですが……」

リン「魔力ですか？」

俺「いえ、別に俺自身の魔力でも十分なんですけど。」

リン「何が足りないんですか？」

俺「ぶつちやけ、人をあんまり若返らせると人が長生きしてしまう」

エイ「そくだよねえ、でも……」

俺「女は自分に若さを求めるんですか？」

リン「そうです」

俺「魔法の構成はこうです。」

術式を見せる。

二人とも真剣に見てますね

俺「話は変わりますが、闇の書が俺の住んでいる世界にあるのはご存知ですか？」

リン・エイ「へっ!？」

俺「俺の友達が闇の書、いや、夜天の書を持っている。だから、俺は夜天の主を救いたい。だから手を貸してほしい。」

リン「私たちに具体的には何をすればいいの？」

俺「このアースラにアルカンシエルを搭載、そして、グラム提督とその使い魔の監視をしてこの事件に関わらせないでほしい。まあ、俺に会わせてくれてもいいし、そうしてもらえたと助かる。」

エイ「なんで、グラム提督に？」

俺「夜天の書の主を保護してるのはグラムさんだし、奴に夜天の書の修復を邪魔させるのが嫌だから。グラムさんは闇の書の永久凍結をしようとしているので。あと、この件についての説明はなのはとフェイトには内緒にしてもらえませんか？」

リン「何故？彼女たちにも協力してもらった方がいいと思うけど？」

俺「あの二人には成長させる何かが必要です。だから、守護騎士たちに適度に潰してもらいます。」

リン「あら、ひどいことをするのね。」

俺「これから先に俺より強い奴と戦うかもしれないのになのは達とフェイト達さらに、クロノを足したとしても俺に一分と耐えられないでしょう。」

リン「ほう、クロノを足しても一分持たないと？」

親バカですか？この世界では。

俺「はい、じゃあ、これから潰しに行きますから見ててください。」

俺「アリシアはまず、自分の体を回復させないとな、ここで待ってなさい。」

アリシア「わかった」

俺はアリシアの頭を撫でる。アリシアが真っ赤になった。

ナデポ！？ナデポなのか！？いや、そんなはずはない・・・

俺は部屋を出てなのは達の方に向かう。

第17話「これが本当の名前を呼んでの儀式……」(後書き)

これくらいなら大丈夫だよな？

第18話「フルボッコ」(前書き)

チートオリ主の定番ですね。

第18話「フルボッコ」

俺・なのは・フェイト・ユーノ・クロノ・アルフが模擬戦のための訓練室に来ました。

俺ははじめにみんなに言いました。一分で俺から撃墜されないでください。できたら、俺は君たちの願いを一つかなえます。とみんなかなり乗り気です。ありがたい、みんな絶望を味わうがいい。

結果。余裕で勝ちました。もちろん、最初の十秒はかわしもしませんでした。誰も一発も入れられませんでしたが、がっかりです。

ここから反撃の時間です。

俺「遊びは終わりだ。」

俺は神速発動。モノクロ世界の中で全員を切る。

クロノだけが反応できましたがやはり切られてました。

俺「はい、全員撃墜」

三十秒もいりませんでしたね。

俺は訓練室で倒れている奴を担ぎ、医療室に運ぶ。

みんなが起きた後に俺が様子を見に行くと。

全員「ユーノ」「」「私〔僕〕に訓練をつけてください」「」

俺「やだ」

全「」「」「即答!?!」「」

俺「俺はめんどくさいのが大嫌いなんだ、だいたい、フェイトは恭也さんに戦い方を教えてもらえばいいし、なのはやクロノ、アルフは何を教えて欲しい?」

クロノ「戦い方、特に接近戦について」

アルフ「私も」

なのは「わ、私は……」

俺「接近戦かそれは恭也さんに頼めばいいよ。たぶん断られはしないだろう、魔法のことも知ってるだろうし。」

なのは「ええっ!?お兄ちゃんが魔法のこと知ってるの?」

俺「当たり前だろ。俺がきっちりとなのはの戦いを記録して渡しておいたからな。」

なのは「ほ、本当なの!?!」

俺「はい!」

なのは「……………ええ〜!?!」

なのはの叫びがこだまする。

一応、なのはもフェイトもクロノもアルフも恭也さんと一緒に修行することになった。

俺も手伝わされたのは言うまでもない。

ちなみに、PT事件はプレシアさんが罪を償うこととなったためにフェイトとアリシアは俺の家にはばらく住むことになったが、今は俺のお金で近くにマンションを借りました。くもともと一人で暮らしていましたが、アースラは一回本局に報告と闇の書についての報告、アルカンシエルの搭載、プレシアの裁判のために帰りました。クロノは最後まで帰りたくないと言っていました。俺がトレーニングのメニューを渡したらすんなりと帰ってくれました。この世界のクロノは戦闘狂!?

俺は毎日、朝の鍛錬とはやてと会うこと、アリシアにべったりとくつつかれる、夜の鍛錬の日課が大変だ。ちなみに、俺がアリシアとフェイトと生活していることがすずかにはれた時は正直怖すぎて一緒に住みます?と聞いたところ、そうすると即答。すずかが俺の部屋に越してきた、俺とすずかとアリシアで生活しています。隣にフェイトがいますがよく俺のところに来ますというかほぼ俺のところに来ます。せつかく洗濯機や冷蔵庫を買ったのに使ってもらってません。悲しすぎます。リンディさん達が来たら使ってくれることを願います。

掃除は自分でしてくれるのがありがたいです。家では俺が全家事担当です。頼むからアリシア、手伝いなさい。お金があつて助かるが正直いたたい出費です。すずかのことは忍さんがお金をくれます。でも、忍さん、お願いだから、変なことをすずかに吹き込まないでください。正直毎回、すずかにその意味を説明するのがつらい。

まだ、俺は子供なのでそれを考えて欲しい。

レイジングハートとバルディッシュのカートリッジシステムの搭載についてはいろいろ考えから仕方ないので、二人の体に負担がからないように設計してもいます。

すずかに魔法を説明したら、私も戦うと言い出したので、前々から設計していた俺のインテリジェントデバイスと後付けのリンカーコアの説明をし、すずかにリンカーコアを入れる。毎朝毎晩俺とアリシアと鍛錬です。今のところ、なのはとフェイトの二人でもすずかに勝てません。アリサには説明しないといけない状況まで追い詰められました。悲しいです。

アリサにもリンカーコアを埋め込み、鍛錬に参加。できれば嫌です。女の子を戦いに巻き込みたくありません。でも、アリサの家で道場を建ててもらい、そこで鍛錬をさせてもらえるのはうれしかったです。忘れてましたが、なのはも家に通いすぎです。おかげで俺の家の食費は上がりまくります。

俺の料理スキルが上がりまくります。なのはは食器を洗ったり、片付けてくれるのでありがたかったです。桃子さんに料理の味見をされたらすごく褒めてくれました。

アリサもここに来ると魔法の練習を手伝わされたりや料理を教えた、やるのがいっぱいです。

俺ははやてに料理を教わったりしています。レパトリーが少ないので。

はやてはいい子です。手が全くかかりません。

逆に俺が迷惑をかけている気さえします。

6月4日にははやての家に行くと誰もいませんでした。

俺「やっぱり、いない！」

俺ははやての携帯に電話をかける。

やっぱり病院か！

俺が病院につくとははやてが起きていて医師たちが守護騎士を怪しがついています。

なんとかしないと

俺「シグナムさん、久し振り！<話あわせろ>」

シグ「は、はい、久し振りです。<何故私の名を知っている。>」

俺「<後で教える>みんな、はやての誕生日のお祝いに来たのか？」

シグ「は、はい、そうです」

俺「ありがとう、遠いところをはるばる」

石田「あの、知り合いですか？」

俺「はやての知り合いで誕生日にドッキリをしかけたら。はやてがうれしすぎて気絶したらしいんだ。」

俺ははやてとアイコンタクトをする。

はやて「そ、そやで、石田先生。うちがうれしすぎて気絶しただけや。」

石田「そうなの？」

俺「そうです」

なんとかその場を乗り切った。

はやての家に戻り、話をする。

俺「さて、はやても帰ってきたし、聞きたいことがあるだろう。」

シグ「お前はいつたい何者なんだ？」

俺「俺ははやての友達で、夜天の書を直したいからここに来た。」

はやて「夜天の書って何？」

シグ「私にもわかりません。」

俺「闇の書の元々の名前だ、お前らが知らないのは知っている。」

みんなびっくり、はやてはわかりませんという顔です。

俺「はやて、魔法はあるんだよ。」

はやて「マジか!？」

俺「マジです。」

ノリがいいなあ。やっぱりはやてはいい奴。

はやて「うちにも魔法使える?。」

俺「ああ、そのかわり、使えるようになるには闇の書を夜天の書にしなければならぬ。だから、シグナム達に俺を信用するように言ってくれ。」

はやて「わかった、私は悠馬を信用する。シグナム達もわかったね。」

俺を疑う目で見てる。

それから闇の書の説明、闇の書のページは俺の魔力で全部埋められ

ること。などなど、いろいろなことを話した。まず、闇の書の守護者の甲冑をはやてにデザインしてもらい、シグナム達にこれからやつてもらいたいことを話した。

シグ「つまり、このなのはという子とフェイトという子を別々に一対一で闘い成長させると」

俺「ああ、あと、すずかとアリサにも一対一で闘って成長させてくれ。俺も変身魔法で変身してサポートはする。」

シグ「どうして、あなたが闘わないのですか？」

俺「疲れさせて俺の鍛錬に休みを作りたいからと闇の書の主はこの世界の周辺にいますと言わせないといけないから。」

ヴィ「だー、わかんねえ」

俺「お前は指定されたときに指定された奴と戦うだけでいい。」

ヴィ「わかりやすく助かる。」

お前もバトルマニアか？

俺「非殺傷設定でとことんつぶしてこいー」

ヴィ「おうよ」

はやて「ところで、夜天の書はどないするん？うちは魔法使えるよ
うになりたいんよ」

俺「だいじょうぶ、魔法も使えるようになるし、足も治るし、闇の書もなくなるし一石三鳥！あつ、カートリッジはこちらから支給するから気にしないでバンバン使え！」

シグ「ありがたい。」

俺「俺からの頼みだし、頼むよ」

シグ「ところで、主の安全は保障されているのか？」

俺「ああ、俺のこの剣に誓って、俺はアークを起動し小太刀を俺の前にかざす。」

シグ「お前も剣士なのか？それにしても短いな。」

俺「これは小太刀です。一応この辺に道場があるのですがその剣術と同じものを使います。道場と言っても普通は入門できないけどね。」

シグ「それはいいことを聞いたな。でも、お前は手を合わせてくれないのか？」

俺「無駄な時間は使いません。時間の余裕はあまりないのです。」

シグ「それは残念だな。」

明らかにシグナムさんはあきらめてない。なんとというバトルジャンキー……

数日後、アースラが来てからなのはに長距離射撃の練習をしなさいといひ無人の世界に向かわせる。

ヴィータにつぶすように言いました。

たぶん今頃ボッコボコです。

しばらくして、なのはがアースラに帰ってきました

なの「強い子に襲われたの」

俺「まだまだ修行が足りないな」

なのはは少し悲しがっていた。

俺は毎日鍛練を朝・夕・晩に行っている。もちろん、なのはやフ
イト、すずか、アリサ、アリシアも一緒です。

一応、いろんな世界で守護騎士を一人一人で探索させています。か
なりの給料が入ります。

他の武装局員？そんなの毎日俺かクロノが潰すから使えないよ。

いい訓練にはなっているようだけどね。おかげで武装局員の戦闘能
力が上がる奴とやめる奴が分かれるけど……

クロノの責任らしいし、俺はそんなに苦しい訓練はやってないよ。
たぶん……

暇な時にやっていたことがうまくいきました。

右目が強化が簡単な吸血鬼化二段階の目である金色の瞳になる

右目だけの二段階吸血鬼化と左目のみを吸血鬼化させた左目の赤い瞳
肉体の他の部分は吸血鬼化しないでこれができるようになりました。
学校ではカラーコンタクトを忘れた。いじめられると思っていたか
ら黒い瞳に見えるようにカラーコンタクトをしていたと嘘をつきま
した。

常時これをやつてなれないとね。

アリシアは吸血鬼化をいろいろと試していたがどうしても牙が伸び
るそうです。

そういえば、シグナムが俺を襲いに来たけど、適度に魔力を使わせ

て帰らせました。

あとでどろどろして戦ってくれないのかと小言を言われた。

第18話「フルボッコ」(後書き)

4000文字くらいあったな・・・

第19話「成長それは大事なこと」(前書き)

私的には2000文字で1話だと思っ
ていますが、この物語はそん
なの関係ありません。

第19話「成長それは大事なこと」

今、はやてと毎日会い精神的に成長させている。
具体的にはゲームしかも泣きゲー

俺「まだ泣いているのか？」

はやて「あれで泣かん方がおかしいって（泣）」

はやての家では原作と瞳の色と髪の色が違う守護騎士がいる。
後、二ヶ月は必要だ。守護騎士達とはやては仲良くなっていった。
よい兆候だ。

俺「いいか。はやて、俺や守護騎士たちがいなくならないために頑張ってくれ。」

はやて「悠馬やシグナムたちがいなくなるんはいやや」

俺「だったら頑張れ」

一応、今、無人世界で定期的にモンスターを狩ることで魔力を蒐集する。

おかげで、闇の書の侵食はない。

一応俺の訓練の結界の中のためばれるようなことはしない。

一応その生物たちも俺が治療しておく。

原作の人達が来ても俺のように気配の察知ができないため、なのは達と守護騎士達があってもばれませんでした。

アリシアにはばれたので本当のことを言う。アリシアが武の天才で御神流を覚える速さは恭也を超えます。びっくりです。くでも、吸

血鬼化の影響かもしれない>
正直気の察知ができたのは驚きだった。
まあ、口を滑らさないように釘は打ったが。

更に一ヶ月経った。

はやてが倒れました。

俺は守護騎士達に責められました。

俺「予定を変更だ。闇の書を完成させる。」

俺と守護騎士達は無人の世界にきました。予定道理のポイントに出て、アースラに報告。

急いでもらう。なのは達が来た。

俺「シグナム、捕集だ、はやく！」

俺のリンカーコアから魔力が捕集される。

シグ「おお、ページが埋まった」

闇の書が完成する。

はやて「ぐっ!?!うあああああ」

闇の書が完成し黒い魔力柱ができる。

はやて「我は闇の書の主なり。封印、解放」

はやての体が成長し、暴走を始める。

よかった。メタルじゃない。＜当たり前です＞

守護騎士「主（はやて）」

俺「ぐっ！まだ、まだだ」

俺は立ち上がりアークを構える。

なの「悠馬君！？」

フェ「だめだよ、そんな状態で闘ったら」

俺「いや、俺ははやてを止める。みんな、力を貸してくれ。それから、守護騎士、邪魔だからはなれてる！」

すず「そうだよ、あんな暴走していても主は主なんだから離れてて
！」

すずかが言った。やはりマッドだったよ。すずかは。

シグ「すまない、後は任せた。」

俺「みんな、奴に魔力ダメージではやてに闇の書の真の主だと認めさせる時間をやれ！」

ぶちやけ俺のリンカーコアの蒐集でよかったです。

まだ、ソニックムーブを使ってませんでしたし、大した魔力弾も俺の馬鹿魔力と馬鹿みたいにいい魔力制御があつてのものなので戦闘中には使えません。メタルは使ったんだが…

まあ、オーシユにならなかつたってことか。
楽です。なのはとフェイトの砲撃と俺、アリシア、すずか、アリサの接近戦によつて何度も何度も魔力ダメージを与える。途中で常時メタルになられたときは困った。

俺「はあ、はあ、そろそろ、はやての仕事が終わる。

はやては管理者権限発動し、防衛プログラムとバグを取り除いていく。

夜天の書と防衛プログラムが分離、黒いでっかい魔力の塊ができる。

はやて「リインフォース、セーフトアップ」

俺「終わったよ、ふう」

分離したと同時に守護騎士が来る。

シグ「あれが悠馬の言っていたゴミか？」

俺「そうだ！あれを消滅させれば終わりだ。」

俺「だーから」

俺は腕を俺の目の前でクロスさせる。

俺「俺がとどめを撃つ。」

みんなびっくりだ。

俺はコスモノヴァを撃つためにチャージする。

おっ！防衛プログラムが、原作道理になつてる。

俺「はあ~~~~！！コスモ・ノヴァ！！！！」

四つの魔力弾が二つ二つに別れ上下に別れ、上下から高密度の魔力弾が撃たれる。

俺「これで終わりだ、消えろ！」

闇の書の防衛プログラムは俺の魔力を受け止められず崩壊する。

俺「おーわった、さっさと帰るか。」

俺は啞然としている全員を置き去りに家に帰り寝ました。
起きたら、なのは、フェイト、アリシア、すずか、アリサは勿論。
はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、アルフ、ユ
ーノ、クロノ、リンディさん、エイミィさんがいた。

俺「何？全員集まって、お茶いるか？」

全「なんでやねん!？」

みんなにツッコミを入れられました。

第19話「成長それは大事なこと」(後書き)

スッキリどころ満載です。

第20話「えっ！？俺は我儘なだけだよ、正義じゃないよ」(前書き)

正義は勝者だけです。

第20話「えっ!?俺は我儘なだけだよ、正義じゃないよ」

俺は最後に使った魔法について問いただされた。

俺はあれは魔力をぶつけ、処理しきれないから崩壊した。と言った。

リン「私は夜天の書の管制プログラムは遅からず、新たな防衛プログラムを作るだろう。」

俺「元々の夜天の書がわからないんだろ。これを使い。」

俺はデータディスクを渡す。

俺「消える気なんだろ?それを使えば夜天の書は元に戻る。使い。」

みんな「はあ!?!」

俺は紅茶を飲みながら軽く無視!

俺「そうだ、これを忘れてた。」

俺は夜天の書にある装飾と同じペンダントをリンフォースに渡す。

俺「その中に入れ、できるだろ?」

リンフォースは信じられないという顔する。

でも、理解し、俺に優しい笑みをくれ、そして、涙を流す。

リン「ほ、本当にありがとうございます」

泣きながら自分に俺の渡したディスクの中のパッチをあてている。
俺はあくびをする。

俺「じゃあ、俺は寝るから、邪魔するなよ。」

はやて「ま、待って、悠馬」

俺「ん？」

はやて「ほんまにありがとう、感謝しきれんわ」

俺「ん？俺は俺の友達のために、俺の我儘のために頑張っただけだ。
そつえば、はやては歩けるようにリハビリ頑張れよ」

はやて「うん、頑張るよ」

俺「じゃあ、俺は寝る、じゃあな。」

俺はベッドに向かう。ベッドに高い低反発のを買ってよかった。
寝るときにいろいろ言われたが殺気を出したらみんな黙った。

俺は朝起きると学校に行く準備をし、朝の鍛錬をする準備をする。
鍛錬にはなのは、すずか、アリサ、アリシアがいる俺は今日のメニューをそれぞれに言い渡し鍛錬を始める。俺は一人でランニングだ。
途中からクロノが俺と走っていたが、クロノが俺に今回の事件について聞いてくるので、俺は俺に鍛錬が終わるまでついてこれたらいい

いよと言っておいた。俺は徐々にペースを上げる。

クロノはばてていたので置いておいた

俺は鍛錬が終わり、家に帰り、アリシアとすずかがいないことを確認し風呂に入る。

汗を流し、俺は早々と服を着る。朝ごはんを作っておく。なのは、フェイト、アリサ、すずか、アリシアが帰ってくるのを確認し、風呂に入れさせる。

フェイトとアリサはフェイトの家で風呂に入る。

いつものことである。

ちなみに俺が風呂に入ってもこの女達は入ってこようとすることで俺が早めに鍛錬を終わらせざるをえない。

朝食を作りながら、みんなの弁当を作る。

俺の弁当の評判はいい。桃子さんには勝てないけど……学校まで歩きます。

ある日のこと

俺「アリシア、寝てばかりいると太るぞ。」

アリシア「悠馬、そういうことは女の子にいつちやいけないんだよ」

俺「俺は少し太った子が好きだからいいの。」

なの「ほ、本当?」

俺「マジです。でも、愛される代わりにかなりの精神的ダメージを負います。こっぴつこっぴつに」

俺はアリシアに飛びつき、腹にある余分な脂肪を愛でる。

アリシア「や、やめてよ」

俺「やはりな、これはいい感じだ！」

愛でる。アリシアは精神的ダメージを受ける。

少ししかないけどね。胸はいじりません。胸は。大事だから二回言
ったよ。

鍛錬に肉体強化を使ってズルするからだ。

なのはがじつと見ている。

俺の目が光る。

なのはを襲うかと思わせて、頭を撫でる。優しくね。

第20話「えっ！？俺は我儘なだけだよ、正義じゃないよ」（後書き）

ポツチャリしている女の子とか好き。でも、ヒロイン＝スタイル良
しoppettankoshikaiない・・・

ぽっちゃりのヒロインを攻略できるといいのに・・・
そんな作品を書いてみたい今日この頃です

第21話「A's 終了」(前書き)

ここまで短くない!?

第21話「A's終了」

俺は学校に行き普通に授業を受け、いつものように屋上で弁当をどはいかなかった。

何故なら、昨日のことを聞かれたからだ、チツ！

俺はだいたいのことを簡単に話す。

俺「後はリンディさんに聞いてくれ。この件についてはもう俺は話さない！」

皆さん少し怒っていらっしやいます。

俺「おい、お前ら、自分にも非があるんだぞ。アリシアははやての家にいる奴らが守護騎士だってすぐに気付いたぞ。」

アリサ「それを言われると……」

すず「何も言えない」

俺、勝利！

俺「だいたい、守護騎士との戦闘でだいぶ闘いに慣れたろ？」

すず「あっ!?!」

アリサ「ま、まさか、このために？」

俺「ああ、だいたい、俺は未来が見えるんだぞ、これくらいできなくってどうする？」

アリサ「き、気付かなかったなんて……」

俺「俺の詐欺師ばりの話術にはまったお前らが悪い」

なの「私たち、強くなろうと必死だったもんね」

俺「逆にお前らが中身は子供のままだとわかってよかったよ。アリシアのように長い間、人のことを見ているようなことはなかったわけだし、当然と言ったら当然だ。」

すず「私たちが試していたの？」

俺「違うね、だから、アリシアも守護騎士と戦っていたわけだし。」

アリシア「お兄ちゃんはみんなを適度につぶせば大きく成長すると思っただけだよ。」

俺「そういうこと、だから、お前から捕集しなかったら？予想外だったのは誰も鍛錬を休まなかったことだ。休めると思ったのに残念だった。」

すず「休んでよかったんだ。私てつきり……」

アリサ「負けたから、鍛錬に来なかったらますます悠馬に嫌われると……」

なの「思ってたの。」

フェ「わたしも……」

俺「俺はそんなに鬼じゃないし、何時でも休んでいいが、遅れた分はきっちり取り戻せよ」

なの・フェ・アリサ「「「やっぱり」」」

すず・アリシア「「私達はまだいいけど……二人は大変ね（よねえ）」」

なの・フェ・アリサ「「二人ともずるーい」」

俺「なら、三人も吸血鬼になるか？」

なの・フェ・アリサ「「なる！！」」

そんなに即答しなくても……

覚悟をきちんと背負いなさい。重い重いその責任を……

俺は学校が終わるといつものようにはやての家に向かう。

もちろん、なの達は達もついてくる。

そこにはリンディさん、クロノ、エイミーさんがいた。

話すことは多そうだ。

その日の鍛錬が無くなったことは追記する。

リンディさんから管理局員にならないかと誘われた。俺は魔力値を

Aランクとして登録させてくれるならと交渉した。

なの・フェイトは原作どおり、すずか・アリサは魔力値A Aランクで登録

仕事はあまりしません。

緊急事態でのことでは使われません。

ちゃんと学校生活を送ります。

学校生活と言えば、俺とアリサは学年一位を争う二人ですが、みんな

な理系は得意なのに文系ができません。俺も前世は苦手でしたよ。

高校からね

さて、試験の前は大変です。みんなで勉強会です。おかげでこのメンバーは頭がいいとして有名になりました。

はやてが入学した時も俺がみんなのレベルまで引き上げるのにどんなに苦労したことか……。思いだただけで涙が出ますよ。

はやては文系でした。唯一の文系キャラ……。俺とアリサの方が点がいいけど。

ちなみに、今、平均点数が95点を下回ったものには俺特製の宿題を自分の家で一人でやってもらうことにしています。初期のはやて以外にこれの罰則を受けた者はいません。

第21話「A's 終了」(後書き)

まだ一カ月に到達しない、だと・・・

第??話「番外」(前書き)

もう少しで一カ月連続で更新!?

っていうか、21・5話がR18で投稿できない……

ギリギリだと思っただけど無理!!

第?話「番外」

あつたかもしれない話

ここはどこだ？

俺は公園？的なところに横たわっている。

かなり寒いし、背中がコンクリートのため熱がかなり奪われる。
海の香りがし、そっちを見ると海だった。

女の子「そんなところで寝てたら風邪ひくで。」

俺の近くに車いすに乗った女の子がいた。

俺「ここはどこですか？」

女の子「ここは藤見町の臨海公園や」

俺は藤見町？どこ？あれ？記憶の中から・・・海鳴市？

俺「すいません、ここは海鳴市ですか？」

女の子「そうやけど、どうしてそんなことを聞くん？」

えっ!？リリカルですか？とら八ですか？

俺「気付いたらここにいたんです。」

女の子「どういつ経緯かわからんなあ・・・」

俺「たぶん、大丈夫でしょう。」

まず、身につけている物の確認をする。
あれ？手が小さいなあ、まあいいや。

それより、自分の持っている物を確認した。

財布「20万円が入っている」、いや、おかしすぎるがあえてスル
！。

ペンダントが二つ、オレンジ色の宝石のと青い宝石のが一つずつ。

あと、手紙が入っている。あと、貯金通帳と印鑑が入っていた。

俺「手紙がある」

女の子「何が書いてあるん？」

俺「ええつと、んっ！？」

俺はそれを見て女の子から離れた。

女の子「どうしたん、何で見せてくれへんの」

手紙の内容。

DEAR 佐々木 悠馬「8歳」<前世20歳>

俺はお前をリリカルな世界に転生させた。

デバイスのクフィールとテジャスを置いておく。

たぶんお前の目の前に八神はやてがいるが、この手紙を見せないように、クフィールに夜天の書の修正パッチはいれといたから頑張れ、あと、戸籍はあるから安心しろ、後のことは手紙に送る。なんとか八神家に潜入せよ！！

P S

お金は通帳に入れてやるから引き落としてね。

P S 2

戦い方は夢で教えるから

P S 3

PS2だのPS3だのどこのゲーム機だ!!

あと、この手紙は一回お前が内容を確認すると内容が変る。

FROM 佐久間 栄太郎

佐久間っておいっ!!

まあいいや、ここでオリ主をやればいいんですね。わかりました。

俺「すいません、どうにもならないようですね。この手紙を見てください。」

俺は次に書き換える内容を見ずにはやてに手紙を渡してしまった。

はやて「えっ!?!こ、これほんまなんか!?!」

はやてはすぐく顔を真っ赤にして俺に聞いてくる。

俺「?ああ、本当のことだ。」

はやて「どうしよう、でも、これからよろしゅうお願いします。悠馬君!」

??なんて書いてあったんだ?

俺ははやてから手紙をとり、内容を確認する。

Dear 佐々木 悠馬

お前には教えていなかっただが、実は許嫁がいるんだ。

お前を置いて行ったところから近くにあるこの場所に行つて、八神はやてという少女に会いなさい。その子が許嫁だから。ちなみに、同封してある紙に八神さん夫妻との約束の紙があるから読みなさい。

俺は手紙を読むのをやめ、同封されていた。＜もちろんさつきまでなかつた紙を見る＞

マジでありましたよ。でも、注意書きにこう書いてある。

悠馬本人には八神はやてへの結婚の拒否は認めない。

と書いてあります。

手紙の続きを読む。

八神さんが亡くなつてしまつた時に行けなくて済まなかつた。

せめてもの償い兼二人の仲が進展するように悠馬を置いていきます。

ご両親の遺書に書いてあつた許嫁はこの悠馬なので、思いつ切りこき使つてあげてください。

と書いてあつた。

なんと孔明の罫か！？

俺ははやてを見る。

俺「あなたが八神はやてさんですか？」

はやて「そうや、うちもお父さんとお母さんの遺書に書いてあつた許嫁が気になつてたんや。」

俺「そ、そうですか、俺もこんなかわいい子が許嫁でうれしいです。」

まあ、置いといて続きを読む。

この手紙を読んだということは私達二人はこの世にいません。

俺「はあ!？」

はやてがビクッてした。

俺「ごめん」

俺はまた続きを読む。

これは遺書である。お前を運んだ奴はうちの部下だろう。そこに置いて行くように言っておいた。

うちに戻っても、もう誰もいないので戻らないように、そして幸せになりなさい、お金は通帳に振り込んであるから使いなさい。

あと、八神さんの家はここなので、お世話になりなさい。最後に幸せになれよ。

FROM 父

なんだろう、涙もでないな。なんだこの意味不明すぎる手紙は。

俺「すみません、これからお世話になります。」

はやては涙を拭い、こういった。

はやて「こちらこそよろしゅうな。」

こうして、俺と八神はやての生活が始まった。
早朝のことだった。

俺はその日に布団と枕を買い、箸、包丁く本格的なやつく、工具を買った。

布団と工具は即日配達してくれるらしい。ありがたいことだ。
買い物から帰るとはやてが料理をしようとしていたので俺がすると止めた。

俺「ここは俺に任せてくれ」

はやて「いいよ、悠馬君は座つといてや」

俺「俺の腕をここで披露させてくれ！」

真面目な顔でお願いしてみる。

はやては顔を赤くし、答える

はやて「わ、わかった。ただし、うちは料理にはうるさいで！」

俺「望むところだ!!」

俺は包丁く買ってきたものくを用意し、材料の確認、和食でいこう。
まず、小さい鍋に水を入れ、煮干しの頭とわたをとり、鍋に入れる。
そして、ご飯を炊く準備をし、大きめの鍋に水と鰹節を入れ、おひたしを作る。

わかめ、長ネギ、豆腐の三つを味噌汁の具にすることにし、切っておく。

お浸しができ、そしてすべてをテーブルに並べていく。

ご飯・味噌汁・お浸し・梅干しの日本食メニューだ。小さい体に慣れなくて大変だが、味付けはばっちりだ。

はやて「おお、おいしそうやないか、いただきます」

俺「どうぞ、めしあがれ」

はやてが味噌汁を飲む。

はやて「こ、これは……」

俺「薄味にしたが、どうだ？」

はやて「ちょうどええ、うまい。だしと味噌、具が完全に調和している……」

俺はここで味が薄いと言われたらここで終わりだったので安堵する。
俺も食べ始める。

はやて「お浸しうまい！それにしても、なんでや？なんでこんなに
おいしいんや？うちも料理には自信があったのに……」

俺は箸を止め答える。

俺「これらのメニューは一回食べるとしばらく同じものを食べても
おいしくない。つまり、日ごろ食べるには向いていないんだ。それ
が俺の料理の弱点でもある。」

はやて「なるほど、おいしいけど、飽きやすいかもしれへん」

俺「それはレパートリーで補うしかないがな。」

はやて「どねぐらいでできるん？」

俺「和・洋・中全部大丈夫だが、正直、中華は無理そうだ。」

はやて「どうしてや？」

俺「中華鍋でないとできない。」

少しの沈黙が流れる。

俺「ところで、はやては学校に行かないのか？」

はやて「うちは独り暮らしやし、車いすやから学校にはいかへんのだや。」

俺「すまない事を聞いた。だが、俺がこれからはいるし、学校に通おう。」

はやて「わかった、悠馬君といっしょなら大丈夫そうや。頑張ってみる！」

俺「そのいきだ。で、どの学校に行こうか？」

はやて「すぐそこに聖祥大付属小学校があるけど？どうや？」

俺「いいんじゃないか？」

ちなみに原作と違い、はやての家が聖祥大の近くにありますが。

はやては魔王とツンデレ、夜の一族と友達になるおつもりですか。。。

まあこちらも頑張ろう。

一応、グレアムおじさんに聞けらしい。俺からの手紙も同封しておいた。

サーチャーはその日に全部破壊した。

はやてとの生活も慣れ始め、はやては俺がはやての服を洗濯すると怒るが、節約するには一気におこなうのがいいので気にしないで毎回行っ。

掃除・洗濯・調理<皿洗いも含む・料理は交代制>・はやての車椅子を押すことが俺の仕事となっている。ただし、この生活にはいろんな苦痛もある。それは夢である。毎日毎日戦い方を学ばされるのだ。たまったもんじゃない。そしてもう一つが……

ピカッ!!

ゴロゴロゴロ

はやて「悠馬君、一緒に寝てくれへん？」

枕を持って俺の部屋に入り、聞いてくる。

俺はもちろんこう答える。

俺「いいよ」

俺は一応言っで置くとロリコンではない!!

幼い子は好きだが、それは保護欲的にだから全然大丈夫!

雷があるたびに俺に抱きつくはやてに、俺は頭に手を置き慰める。

俺ははやてが寝るまでそうしていた。

ということがあるなど、俺になつてくるはやてさん。このままで

大丈夫なのでしょか？

数日するとグラムさんからの手紙が来た。

俺とはやてにあてた手紙が違う封筒で送られてきた。

はやては手紙を読むところだった。

はやて「転入許可が出たで！！」

俺はそれを聞き、よかったと思いつつも自分に送られてきた手紙を
読んだ。

それは俺への警告だった。

闇の書の修正などできるはずはない。

早急にはやてくんから離れなさい。

こちらも強行手段は取りたくないのね。

とあった。もちろん出ていくつもりはない。

俺は保護者となっている隣に住んでいるおばさんに書類を書いても
らった。

隣のおばさんは俺の父親と血のつながりがあるらしい。特には知ら
ない。

転入試験の勉強はおばさんが用意してくれたものを使いテストした。
俺、全教科満点。あたりまえですね。

はやて、平均20点、苦手教科はない。

はやて「何でそんなに頭いいん！？」

つて俺に言ってきたのはやてだが、俺は仮にも一度大学に通っていた
人間だ、これぐらいできなかつたら困る。

転入試験まで2週間、はやてに勉強を教える日々が始まった。

一応言っておくとはやては小学三年生までの勉強はできるのだ。応
用力とそれ以上がないだけなので教えるのは簡単だった。少なくとも
俺の前世の妹弟よりは頭がよく、教えたことを理解してくれた。

あいつらは本物の馬鹿だったようだ。俺の説明が悪いわけじゃないかな。よかった。よかった。

俺ははやてが勉強を頑張ったことを試験が終わってから褒めた。もう、めっちゃくちゃに。

あと、気付いたんだが、俺はナデポが使えるらしい。はやての頭を撫でたら顔が真っ赤になった。まあ、危険な能力なので、封印しよう。そうしよう。

転入して俺とはやては同じクラスに転入した。もちろん、学校に頼み込んだためだが。

一応、特別教室という手もあったが、それでは友達ができにくそうなのでやめた。

先生「はい、注目！今日は転入生がいます。」

俺は教室のドアを開け、はやての車椅子を押す。

先生が黒板に俺の名前とはやての名前を書く。

先生「佐々木悠馬君と八神はやてちゃんです。」

はやて「こんにちは、はじめまして、八神はやてです。体調が優れなくていままで学校に行ってへんかったんで、皆さん友達になつてや。これから、よろしくお願いします。」

俺「俺は佐々木悠馬です。佐々木っていう名字はよくあるので悠馬でいいです。よろしくお願いします。」

俺はクラスのメンバーを見渡す。あの三人組はいないようだ。

席は後ろが開いているな。そこにはやてを押しこめ、背中から教科書を出す。

一時限目は算数だ。

小学生の内容は完ぺきなので、俺はノートに落書きをしながら、授業はどこまで進んだかを教科書に書き込んでいた。

四時限目は体育だった。

ドッチボールか・・・懐かしすぎる。

適当にしている。

女子は男子に混ざっている。まあ、普通は女の子が頑張ったりしないために男子だけが敵だったりするが、このとら八ちっくな世界では通用しない常識らしい。目の前で男女関係なくボールを投げている。ちなみに、はやては離れたところで見ている。

俺はとりあえず、やる気もなく、強いボールを投げる人にはボールをキャッチ！

適当なところでアウトになる。

俺「見ていて楽しいか？」

はやてに話しかける。

はやて「見てるだけ・・・私も混ざりたいなあ・・・」

第?話「番外」(後書き)

何故かここまで。

言っておきますが、21・5話がエロイのではなく、単語がヤバいだけで内容は健全です。たぶん・・・

第??話「番外としか書いてない」(前書き)

サブタイトルの通りです。

第??話「番外としか書いてない」

キイイイイン、キイイイイン

ミラ・モンスターか!?

俺は学校に向かおうとバスに乗るところだった。

久しぶりにこんな遅い時間に出してしまったことを後悔していたが、逆だったらしい。

なのはが狙われている!?

キイイイイン、キイイイイン

チッ!

俺「なのは!危ない!」

なのはを突き飛ばす。その時、ミラーモンスターが俺の体に傷をつける。

俺「ぐっ!」

どうやら、背中を刺されたらしい。やばい、めちゃくちゃ痛い。

なのは「悠馬君!？」

俺はポケットからカードデッキを取り出す。バスにそれをかざし、Vバツクルが現れる。

俺「へ、変身!」

ポーズはとります。取らないと格好悪いでしょう？

俺は仮面ライダーナイトになる。

俺はそのままミラーワールドに入る。

何だ？俺の死亡フラグか？ハイドラグリーンがいつばいおるやん！！

俺はデッキからカードを引き抜く。

そして周りに風が吹き荒れる。

ダークバイザーがダークバイザーツバイになりカードをベントイン

< サバイブ
SURVIVE >

俺はナイトサバイブになる。

さらにカードをデッキから引く抜く。

ハイドラグリーンがこっちに向かう。

遅い！！

< ショット
SHOOT VENT >

ダークバイザーツバイがダークアロー形態に変形する

< トリック
TRICK VENT >

俺がどんどん増えていく。

シャドレイリユージョン達は剣で戦ったり、ダークアローを撃つ！

俺はカードを引き抜く。俺がベントインする前にシャドレイリユ-

ジョン達が俺の近くに集まる。

< フラスト
BLAST VENT >

ダークウイングがどこから来てくれる。そして姿がダークライダーとなる。

そして、ダークライダーが起こした竜巻によってすべてのハイドラグリーンが地面にたたきつけられる。

俺の近くにいたシャドレイリユージョン達がハイドラグリーン達と戦うさらに俺はカードをベントインする。

<FINAL VENT>
ファイナルベント

ダークライダーに俺は乗る。そうするとダークライダーは徐々にバイクになっていく。

そのバイクでハイドラグリーン達とシャドレイリユージョン達に突っ込む。

<疾風断>

ハイドラグリーン達とシャドレイリユージョン達が消える。

俺は少し休む。

しばらくすると俺の体が粒子化し始める。

そして俺はミラーワールドから出る。

俺「ふう、バスが動いてなくて助かった。」

俺は倒れる。痛い、アスファルトが痛い。

なのは「悠馬君!？」

やばい、疲れた……。

傷はもう塞いだし、中身の損傷もすぐに再生できそうだ。

あとはどうすればいいんだろう?あれ?かなりねむい。

おやすみ。なのは……

なのは「悠馬君！死なないで〜！！」

俺に叫ぶ人がいる………

俺は起きたら病室にいた。

リステイ「あつ！目が覚めました。」

あれ？あなたは……リステイさん？

俺の右手がなのはによって握られてる。

俺「なのは……」

なの「悠馬君！心配したんだからね。」

泣いてますね。あれ？俺、無傷だったはずだけどなあ。

俺「ごめん、心配掛けたな。」

そういえば、この体で病院に来るのは初めてだったな。涼のときは何度も病院に送り込まれたな。美由希に。あれは嫌だったな。「何か拾い食いでもされたのですか？」「いえ、美由希さんの料理を食べただけです。」「本当ですか？」などという会話がありました。その後、病院に運ばれること数回。医師から「毒でも盛られているんじゃないですか？」といわれてしまう。その料理から毒物反応は出ませんでした。あらゆる感覚がむしばまれてしまうというものでした。まあ、話は戻り。

なの「大丈夫だつてお医者さんも言っていたけど。私は怪物が鏡の中から出てきて悠馬君がけがをする所をみたの……」

俺はなのはの頭に左手を置き撫でる。

俺「大丈夫だよ、俺は」

そこに医師が入ってくる。

医者「どうかね、調子はどうかね？」

俺はなのはを撫でながら答える。

俺「大丈夫です。特に痛いところはありません」

いろいろと話をし、体のことは秘密にしてもらおう。まあ、ブレインタイトを使いましたけどね。

あと、俺は5時間寝ていたらしい。俺がミラーワールドから出た時にバスが動いていなかったのは、ハイドラグーンに襲われた人がなのは一人ではなく、もう一人いて、それがバスの運転手だったらしい。運転手が襲われているのをアリシアが助けたいらしい。だが、ハイドラグーンによって運転手は骨折したらしい。それで、バスが動かなかったということだった。

それを医師がいなくなつてから聞いた。

俺はベットから起き上がり、なのはを抱きしめる。

俺「すまない、心配をかけたな。」

なのはは赤くなり答える

なの「あ、ありがとう。私を守ってくれて。」

なのはは離れる。残念

俺は少し考え、からかうことに決めた。

俺「なのはのことが好きだから。なのはが危険なときに体が勝手に動いてしまった。ただそれだけだ」

どうだ？これで。

なのはが真っ赤になる。

なの「ね、ねえ、それって告白なの？」

俺に真面目に聞き返す。

俺「俺の気持ちを素直に表しただけだよ」

なのははますます赤くなる。かわいいなあ。

なの「わ、私も悠馬君が好き！」

な、なんだと！？

からかっただけなのにカウンターパンチを食らった。

シヨックがかい。顔に出さないけど。たぶん、なんとなくそれを察してはいたが気付かないようにしていたからであろう。前世でも同じことがありましたし。

俺「なのは、俺は人間じゃないんだよ。それでもいいの？」

俺は人間ではない。夜の一族より人間から大きく離れている。

なのは少し考え答える。

なの「私は、悠馬君が人間じゃなくたって関係ない。アリシアちゃんが悠馬君と付き合ってたとしても関係ない。やっぱり、私は悠馬君が好き！」

なん・・・だと・・・。女の子は強いなあ。

俺「俺は、どう答えていいかわからない。俺は、へたれだから・・・」

俺は答える。

なの「私は悠馬君が好きだから。答えを聞くまでおとなしくしてよ。」

なのははそういうと病室から出て行った。俺は追うことができなかった。

そう、なのはが俺に告白した日のことだった。小学六年生初夏のことだった。

そして俺はさっさと家に戻った。

家に戻るとすすかとアリサがいた。奥にアリシアとはやてがいる。

すすか「ねえ、悠馬君。なのはちゃんに告白されたって本当？」

アリサが吹く。そして、アリサはすすかの肩をつかみ。

アリサ「ちょ、ちょっと、すすか。そんなにストレートに聞かなくても」

アリサがすずかに聞いた。

すずか「アリサちゃん、大事なことなんだよ。悠馬君、答えて」

俺はアリサの面白い行動からすずかに視線を戻し答える。

俺「本当だよ。病室で告白された。返事は待つと言っていた。」

正直に答える。

アリサ「な、なのはが……」

すずかは何かを決心したような顔をした。

すずか「悠馬君、わ、わたし、悠馬君が好きなの。付き合ってくださいー！」

俺「俺もすずかが好きだ」

すずかの顔は真面目なままだ。本気なんだろう。なのはのときのよ
うに薄々は気付いていたのだろう。びっくりはしない。

すずか「それは、わたしと付き合ってくれということ？」

俺「察してはいるんだろうけど……答えはまだ俺の中で出て
いない」

すずかは少し残念な顔をする。

すずか「わ、わたしは、悠馬君がなのはちゃんやアリシアちゃんと付き合いながらもいいから。付き合ってほしいの!」

おまえもか!?

俺「それはなのも言っていたな。だが少し考えさせてくれ。それに俺は人間じゃない、それでも俺を愛せるか?」

すずか「それはなのはちゃんにも聞いたの?」

俺「ああ」

肯定を示す。

すずか「わたしは、悠馬君が好き、それは人間だろうがなかるうが関係ないの。悠馬君が好きだから。」

俺はびつくりする。

俺「わ、わかった。だけれどすまん。まだ待っていてくれ。俺はへたれだからすぐに答えが出せない。だけれど、俺もすずかが好きだこれは本当だ。」

すずか「わたしは待つから。答えが出るまで。」

女はすげえなあ。

俺はゆつくりと座敷に上がり座る。

アリサがふるえている。

こわっ!?!なんか、赤くなりながらも魂?気?オーラ?そんなものがアリサから大量に放出されていた。

俺はアリサに声をかける。

俺「おい、大丈夫か？」

アリサが泣いている。

俺「お、おい、本当に大丈夫か」

アリサ「うっ、うっ、わ、私だって悠馬が好きなのよ!!」

ここでかよ!?

俺「お前もか。で?どうして泣いてるんだ？」

アリサ「なのはとすずかが悠馬に告白するなんて思ってなかったのよ。二人が悠馬を好きなら私はあきらめようと思ってた。でも、目の前ですずかが告白するのを見て、すごい悔しいと思った。私も悠馬が好きなのに。しかも、それを打ち明けられないなんて。そして悲しくなつて……」

アリサが泣いています。

俺も泣きたいよ。

俺「俺は、俺もアリサが好きだ。でも、俺が人間じゃないのに俺を好きだからって人間をやめさせてはいけな思っているんだ。」

アリシア「はあ、そんなこと悩んでたの?さっさとみんな吸血鬼にしちやえばいいんじゃない?ねえ、はやて?」

はやて「そやなあ、うちも悠馬が好きやし吸血鬼になっても悠馬に

愛されるなら本望や！」

はあ、本当に女は強いな。心が。

俺はどうすればいいんだ？みんないい子なのはよく知っているし、みんな好きだ。だが、話が突然すぎる。

アリシア「もしかして結婚のこととか考えてる？それは管理世界に一夫多妻制のところがあったから戸籍をとれば大丈夫よ」

すずか「それ、本当？」

はやて「マジヤ」

なんか知らないところで話が進んでいるなあ。

はあ、どうすればいいんだろう？

たぶん俺の中で決まっではいるんだろうけど……認めたくねえ。そんなことという自分がいる。

誰か一人を愛すことにするべきだと両親が訴えてくる。

フェイトが突然俺の家の玄関を開け入ってくる。

フェ「ゆ、悠馬。わ、わたしも、悠馬が好きだから……！」

またややこしくなった。

でも、フェイトさんが嫁って

前世の俺なら……フェイトさんが嫁になる！？そんなのやだ。ポソツはいらないういうやつだったのになあ。リアルに可愛いかなあ、などと考えていた。

すずかとアリサは大歓迎だったけどな。はやてもだけど。

なのは……あの父と兄が……

俺はしばらく答えを出せないでいた。

その後、俺はなのは達のことを全部受け止めることにした。ただし、自立してからそれでも好きなら受け入れるとした。

第??話「番外としか書いてない」(後書き)

ハッピーエンド!!!

終わってないよ?

第??話「番外としか書いてない?」(前書き)

ストック・・・まだあるんですよ・・・
どうしてこんなにあるの？

第??話「番外としか書いてない2」

中学一年生になり、なのはたちと違うクラスになった。

中学一年生のある日のこと。

俺の下駄箱に手紙が入っていた。

普通の手紙に放課後に屋上に来てください。待ってます。

何だ?これ?無視するか?でも、女の子の字だなこれ。

送り主が書いてない。行くことにするか。本人が待ち続けるのは辛そうだから。

放課後、手紙の主は屋上にいた。女の子だった。

たぶん彼女が手紙の主だろう。

俺「すまない、待たせてしまったか?」

女「い、いえ、私も今来たところです。」

いや、間違いなく30分は待っていたのだろう・・・

俺「俺に何か用?」

はつきり言つてこの女とは面識は少ないはずだ、同じクラスだけど・・・

女「悠馬さん、そ、その……好きです。付合ってください」

俺はびつくりする。何故かって?フラグを立てた覚えがないからだ。

俺「ちょ、ちょっと待て、な、なんでだ?俺はクラスでは影の薄い存在のはずだ。」

そつだ、俺は前世からの記憶を引き継いでいるから、基本的にはその時と同じような影の薄い存在であるはずなのに……。

女「だ、だって、悠馬さんはか、かつこいいし、勉強できるし、やさしいし。」

俺が優しい？

俺「俺は優しくない。」

女「そんなことありません。廊下で他の人が重そうなものを運んでいると手伝つし、いろんなところで他人の手助けをしていました。」

それは前世でもやってたけど？やっぱ顔がか？

俺「それは見てられないだけだ。あとな、俺に彼女はいるからな。

お前とは付き合えない。」

女の子は残念そうな顔をする。

女「そ、そうですか……じゃ、じゃあその彼女は誰なんですか？」

俺はどうすればいいんだろう。誰と答える？いい案が浮かんだ。

俺「秘密だ」

女「本当にいるんですか？」

疑われてる!？

俺「嘘は言わないよ。俺は嘘言わないから。」

冗談や本当が6割近くで残りを嘘で固めるとかはやりませぬけどね。完璧なる嘘は言いません。」

女「わ、わかりました」

この日は普通に過ぎて行った。

俺は彼女と不自然な距離を作ったりはしなかった。それは向こうが作ってくれるし、何より面倒だからだ。

ちなみに、後に、ラブレターが俺の下駄箱に入っていることがあったりしたが、最初は普通に女の子から来ていたし、屋上に呼ばれるもしくは送り主の名前が入っていたので、その人に丁重にお付き合いを断ったものを送った。なのはたちが最初の方は嫉妬することがあったが、特にすずかが怖かった。きちんと断るので今は安心して居ようだ。偶に見に来るが・・・（告白を行った女の子に見られて居ないし妨害もしていない）

正直、俺の顔を見て好きになってないか？前世も同じような行動をとっていたぞ。まあ、格好良くないし頭もあまり良くなかったし、運動もできなかつたけどこれは俺への当てつけか？ム力つきます。中身で選んだ？ウソだろそれ？みたいな感じで俺は怒っているんで告白されてもその勇氣は買いたいのが正直、ム力つきます。それよりム力つくのは俺がもてるからってそれを裏で恨んで俺を呼び出すやつだ。最初は単体で来るものが多かったが増えに増え、かなりの数になった時は俺もキレた。俺だつて告白されたくないんだよ！！正直、彼女いるしくしかも多数＞俺が人間じゃないし。それを知らないやつらなんてうざいんだよ。あと何度もアタックする奴についてはかなりム力つきます。ウザい！！そんなのは前世の俺にやってください。あと！！俺のストーカーをする人間がいたときは罨を仕掛

けてぶちのめしました精神的に おかげで未だに俺の彼女たちがばれません。バレタ方がいいのか？いや、その方が面倒だろうか・・・。だいたい、俺にどうして惚れるかがわからない。陰険なやつとか、影の薄いやつとかなら納得できるが。お金持ちとか？貯金は多いけど・・・そんなこと知らないはずだし、質素な生活してるし、大人っぽいとか言われたけどそれって前世の記憶がある以上あたりまえのことだから。

あと、ポーっとしながら空を見上げている顔ががかつこいいとかさ、それって俺が今日の献立を考えるときの癖だからあまり意味はないよ。あと、それも顔だろ！！

俺と友達になる奴ってあまりいないけど、俺と仲良くしようとする女はいるが、堂島昌っていう男は違う。昌は親が亡くなっていて自分で家事をすべてするらしい。俺とかなり仲の良い友達だ。見た目はかなりかつこいいが少し怖い目つきをしているため彼女はいないらしい。こいついいやつだからさっさと彼女ができることを願う。ちなみにこいつの頭は俺やアリサに及ばないもののアリシアに次ぐ頭の良さである。しかも努力である。アリシアは一夜漬け派らしく、一夜で俺の作った山を無視しそこを勉強しやがる。正直、アリシアは俺の山勘が当たらないことをうまく使ってないか？まあいいや。俺は天才派らしく、一回覚えたことは忘れないが数学はそれをきちんと理解しないとそれを全く使えないのできちんと勉強するようになっている。(本編に出番の予定はない)

そういえば、小学生の時になのはやフェイトが休んだ時に俺のノートを貸してくれというから貸してやったら、二度と借りようとしなくなつた。俺の字が汚いからだろう。基本、パソコンでいるんな書類を作成するため打ち込むためにはしていないけどね。前世でもよく言われましたよ。字が汚いつて。だから何？人生に困るの？かなり困りますが、他人に迷惑がかからないのでよしとしています。ペンの持ち方は正しいのになあ。ペンの持ち方は前世で俺がよく覚えてないほど小さい頃から箸が使え、そこから箸を一本抜くという

ことでかなり簡単に覚えました。おつとかなり話が脱線したなあ。
まあいいか、別に誰かに迷惑かけてないし。

結論としては、俺は今の顔を気に入っているもののそれを気に入られるのは嫌なんです。中身で認めてもらいたいんです、前世の自分が悲しくなるから!!!

第??話「番外としか書いてない?」(後書き)

オリキャラが今更登場。そして、リア充もげろ!!!

第??話「番外としか書いてない4」(前書き)

3は出せない。

第??話「番外としか書いてない4」

なあ、最近、夏休みがループしてない？俺が因果律から外れてるのをいいことにループしてませんか？

俺「アリシアく、夏休みが終わんないく。」

アリシア「はあ？何言ってるの悠馬？頭でもいかれた？」

俺しか気づいてねえ！！

つてことは俺だけが因果律から外れてるからか！？

ちなみに現在、夏休みループ4回目です。

どうすればいいでしょうか。原因は分かっているのですが、原因に会うにはなにも用意してないので会いたくないです。

俺「どうするかな」

俺は部屋に戻り、一人で対策を考える。

鏡が光り、佐久間さんがあらわれる。

佐久間「よっ！」

さわやかに挨拶してきました。

俺「こんにちは」

俺は挨拶を返す。

佐久間「はっはっは！そのようすじゃあ涼宮ハルヒが存在するとい

うことに気付いたな」

俺は頷く

俺「はい」

佐久間「別にそんなのは俺たちの力で切り離せるんだが……」

俺「何か問題が？」

佐久間「実はね。原作と同じようにループするんだが、何故か、夏休みそのものがループするんだ」

俺「ま、まさか……」

佐久間は不敵に笑う。

佐久間「そう、その通りだよ。俺が夏コミをループするのを止めさせるわけがなかるう。ついでに終わってないゲームも片付けている」

俺「つまり、あと何回かはループさせると？」

佐久間「イエッス、具体的にはあと14周くらいしたいから。」

マジで言ってるのか、この人

マジなんだろうなあ。

俺「わかりました、従います。だけど、涼宮ハルヒを俺のかかわる世界からいなくしてくださいよ」

佐久間「それは分かっている。」

俺「じゃあ俺もいろいろと研究に使わせてもらいますので、最後の夏休みのときは教えてください。」

佐久間「わかったよ」

それからいろいろの研究を重ね、また、ハルヒの力の及ばないところで次元航行可能な戦艦【変形あり】とかも作った。もちろん、次元航行可能である。

第??話「番外としか書いてない4」(後書き)

出せない話が多いことにやっと気付きました。

第01話???編(前書き)

話が途中で終わっているので書くかは後で考えます。ちなみに20
くらい話があったりなかったり。

第01話???編

俺は持てるものを持てるだけ持ってチケットを取り出す。

俺「マジに使えるのか?これは。」

ぼーぼー

やっぱり、本物だったか。

ガシャンガシャンとレールがてて来てゼロライナーが俺の目の前で止まる。

侑斗「本当にここなんだな?デネブ」

デネブ「そのはずなんだけど……」

侑斗「オーナーも人使いあらいいな。ある人物を過去に送ってくれなんて、時の運行を狂わす気かよ。」

デネブ「その人物がそこに行くことによって、時が安定するってオーナーが言ってたよ」

侑斗「だったら、デンライナーの方に頼めってたよ。」

俺、かなり緊張……

俺「あ、あの、桜井侑斗さんですよ。俺が佐々木悠馬なんですけど……」

俺はチケットを見せる。この二人はすごく大好きなキャラである。
ゼロライナー、かつこいいなあ。

侑斗「わかったよ、お前を過去に送るんだな。」

俺はうれしかった。あのゼロライナーに乗れるなんて、他の奴らも
連れてくればよかった。

俺「かつこいいなあ、ゼロライナー」

侑斗「そうか、俺も気に入ってはいるんだ」

俺「デンライナーより、こっちに乗りたかったのでうれしいです。」

言葉がおかしいくらいハイテンションになっている！！

デネブ「そ、そうなの？」

俺「デネブもかつこいい。」

デネブ「そ、そう言われると照れるなあ。」

侑斗「そんなことより、この時間に行けばいいんだな。」

俺「お願いします。あと、これを侑斗さんに渡すように言われたん
ですけど……」

俺は変身のカードの束を侑斗に渡す。

侑斗「これは？誰からだ。」

俺「それは言えないんですけど。それは変身のカードと違いはないんですけど、デメリットはないそうです」

侑斗「そうか、ありがとな」

俺はその後二人と話しながら目的地に着いた。

俺「本当にありがとうございました。」

侑斗「気にすんな。」

デネブ「またね。悠馬。」

俺「またな、侑斗、デネブ」

ぽーっぽー

ガシャンガシャンとレールが無くなりゼロライナーが時のはざまに戻っていく。また、ゼロライナーに乗れるといいなあ・・・

第01話???編(後書き)

ゼロノスは好きですよ！デネブいいですよね？

第02話???編(前書き)

何処の世界かな？

第02話???編

俺は学園から離れたところに来たようだ。

俺は女性化する。

まだ誰にも見られていない。

強い奴や魔法使いが近付いている。

この強さは高畑とエヴァ、たぶん、今、射撃の態勢に入り俺を狙っているのが龍宮だろう。

俺「ふう、とりあえず、セットアップ」

<はい、分かりました。>

<OK >

俺はアークとテジヤスを起動。バリアジャケットを展開。
どうやら高畑が来たようだ。

タカ「君はどうやってここに侵入したんだい？」

俺は無手です。

俺「とりあえず、私はあなた達の敵じゃない。」

タカ「それは我々が判断する。」

構えをとりましたね。殺気が伝わってきますがこの程度では俺は倒せない。

俺「そうですねか・・・じゃあ、私がここで貴方に勝負して勝ったら認めてくれるかしら？」

タカ「いいよ、たぶん君は僕には勝てないだろうけどね」

俺「少女とはいえ、侮るのは良くないよ。高畑さん。」

俺はソニックムーブを使い高畑の後ろに回る

タカ「なっ！瞬動か！？」

俺が切ろうとした瞬間に瞬動で避けられる。

俺「瞬動とはこれか？」

俺は瞬動し、高畑を切ろうとする。

ちっ！

パンチしてきやがった。当たったら痛いのでフィールド魔法で防御、全然痛くない、このパンチについては平気なようです。

タカ「ほう、あれを無傷か。やるねえ。」

俺「貴方に褒められてもうれしくないわ。カートリッジロード」

<ロードカードリッジ>

アークの刃に魔力が付与される。

俺「次で倒す。」

タカ「次は何を見せてくれるんだい？こちらも本気を出させてもらおうか……」

俺はソニックムーブに神速を乗せ、高畑の後ろに回るようなそぶりを見せ、神速で更に後ろの方に回り、反応できないように脇から切る。

高畑はそれでも防御しようとするが遅い。

俺「私の勝ちよ！」

俺はテジャスを二丁抜き、龍宮とエヴァに向ける。

俺「さあ、学園長のところに案内してもらえないかしら？」

二人はびっくりしている。

エヴァ「一応、気配は消していたつもりなんだがな」

俺「私から言わせれば甘いわ、アリシアでも気付くわ」

エヴァ「おい、龍宮、お前の敵う相手じゃない。こっちに来い。」

さすがエヴァンジェリン。

俺「じゃあ、案内してください。」

俺は肉体強化をし、高畑を背負う

エヴァ「私もお前に聞きたいことがある。学園長と話終わったら私につきあってもらうぞ。」

俺「いいですよ、あなたの呪いもその時、解いてあげましょう」

エヴァ「なっ!?!」

俺「私は嘘をつきませんよ。基本的に」

エヴァ「なら、楽しみにしてるよ。」

絶対無理って顔してます。

解いた時のことを考えるとわくわくします。

着きました学園長室。

あの頭は……どうでもいいです。リンディ茶より気にならない。

俺は高畑をおろしその辺に置く。

龍宮は席を外した。

俺「聞きたいことがあるんだろ?」

学園長「ふおふおふお、何故、君はあんなところに急に現れたのかね」

俺「やることがあつてこの学園に来ました。」

畏は6〜7かな?でも発動はしなないと思う。

学園長「それは何かね?」

俺「第一に魔法使いの観察かな?第二は暇だから?」

エヴァ「それじゃあ、話になってないぞ。」

俺「ええ、エヴァさんなら分かってもらえると思ったのに。」

エヴァ「はあ？それはどういう意味だ？」

俺「俺はあなたと同じですよ。エヴァンジェリンさん。」

二人はびっくりする。

学園長「君は吸血鬼なのかね？」

俺「そうだよ、まあ、他人の血なんかここ五年間飲んでないけどね。」

学園長「なおさらわからないな。何故、君はここに来たのかが。」

俺「私の使う魔法と貴方達を使う魔法が全然違うといえはわかるか？」

エヴァ「なるほどな」

学園長「ならどうしてここに来た。ここ以外でも魔法を学ぶ場所はあるだろうに。」

俺「俺は少し未来が見える。それを人に話すわけにはいかないけど、この学園であるすごい魔法使いの子供が先生をするんでしょう？その子の未来が気になってここに来た。これなら理由になるかしら？一応、私のような存在が現れることが予見されていたでしょう？」

エヴァ「どうしてそれを……、いや、未来予知かあながち嘘ではなさそうだ。予見のことについても君の事で間違いないだろう。」

俺「私の頭を覗こうとしても無駄だから、これだけは言うておく。私を2・Aの生徒にしてくれない？見た目は女子中学生に見えるはずだけど……」

エヴァは俺を見る。

学園長も俺を見る。

エヴァ「見た目は大丈夫だろう。あのクラスは特殊だからな」

学園長「あまり、わしは君を信用できないんじゃないが……」

俺「信用ないのは勝手だが、私はこの学園を一人で、しかも一瞬で消滅させられるだけの力を持っているの。見せてもいいけど。信用せざるを得ないでしょ？私としては私の監視を兼ねてエヴァさんの家に住まわせてくれるとありがたいわ。」

学園長「そうじゃな、それならいいじゃろう。」

エヴァ「はあ？私がこいつと生活するのか？」

学園長「おねがいじゃ、それに、こっちからも彼女の生活費に色をつけて出そう。」

エヴァ「わかった、それでいい」

俺はエヴァさんに連れられてエヴァの家に向かう。

第02話???編(後書き)

どうしてこの世界に来たのかは理由は神と悪魔のパシリ?を見てく
ださい。たぶん後で書く予定。

第03話ネギま編（前書き）

まだありますよ。駄文ですが！

第03話ネギま編

俺はエヴァンジェリンの家につくなり、テーブルに座らせられた。

エヴァ「さつき、私の呪いが解けると言っていたな。今すぐ解いてみる」

俺「わかったわ。エヴァの頭に手を置かせてくれる？」

エヴァ「わ、わかった」

俺は術式を読み込む。

術式が荒いなあ、魔力で相殺・術式の逆演算してっ

<<マスター、終わりました>>

俺「了解」

エヴァ「ん？どこから声が？」

俺「登校地獄書き換え開始。」

<<了解、後五分で完了します>>

二人で五分か、かかりすぎだろ。

どんだけ荒いんだよ。

エヴァ「解けるのか？」

俺「登校地獄は後五分で解けるよ」

エヴァ「そ、そうか、これで、奴らに復讐が……」

俺「何か、悪いことを考えているようだけど。魔力は元に戻らないから。」

エヴァ「はあ？だって登校地獄の呪いは解けるって言ったじゃないか」

俺「登校地獄はね、魔力封印はエヴァにかかった呪いじゃないみたい。たぶん、電気関係の魔力封印のようね。」

エヴァは怒っている。

俺「まあ、これが終わったら調べてみるよ。」

そして五分後

<<登校地獄の呪い解呪完了>>

おわったようだ。

エヴァ「やはり、魔力が戻らん何故だ」

俺「さっき言ったでしょ？別の呪いだって。」

エヴァ「呪いが解けてないんじゃないか？」

俺「新学期が始まったらわかるわ、通わなくてもよくなっているか

ら。だからといってサボらせないけど。」

エヴァ「なら、全然今までと変わらないじゃないか!?!」

俺「テジャス、この学園の中にある呪いをすべて探して。」

<OKです >

俺「アークは待機で」

<了解です >

エヴァ「そうだ、さっきから気になっていたのだが誰と話している。

」

俺「デバイス、魔法使いの杖みたいなものよ。待ってて、一基エヴァにあげる」

俺は荷物<高畑の上にさらにしょってました>からベルカ式のデバイスを渡す。

ほぼレヴァンティンですが、変形できません。

エヴァはネックレスを渡されて意味が分からないという顔をしている。

俺「セットアップって言うてみて」

エヴァ「???セットアップ」

<stand by ready set up >

ネックレスがレヴァンティンになる。

エヴァ「おお、すごいな」

俺「めんどいからベルカ語じゃありませんが」

エヴァ「???なんだ、そのベルカ語とは」

俺「こつちの世界の言語だ、まあ、気にしないで、私はできないから」

古代ベルカ語は知りません。正直、ミッド語も怪しいです。翻訳魔法って便利

エヴァ「まあ、いい、ところで、これで何ができるんだ」

俺「これとは失礼な、AIが入ってるんですよ自我があるんですよ」

エヴァ「す、すまないな、で、名前は?」

< please named me >

俺「私は名前を付けてません。候補にはレヴァンティン?<ツヴァイ>という名があるけど?」

エヴァ「悲惨だな、持ち主があれでは……」

俺「はあ?それはエヴァのなんだから好きに名前を付ければいいじゃない」

< please named me >

あれ？そういえば何でレイジングハートと同じ声？
女の声でした。

エヴァは考えてます

俺「アルビレオとk「却下だ」いいなと思ったのに……、
じゃあ、エクスカリバーで」

エヴァ「うーん、すまん、それにさせてもらっ。」

< thank you my master >

俺「ここにあるカートリッジをつめて魔法を使う時にカートリッジ
ロードといえばそのカートリッジ内の魔力が使える。まずは実践。
飯を食ったら別荘貸して」

エヴァ「おいおい、別荘まで知ってるのか？」

俺「私に知らないことはないと思わないでね」

エヴァ「意味がわからん」

そこに茶々丸が入ってきてきこった。

茶「マスター、今までで一番楽しそう」

第03話ネギま編（後書き）

口調が統一されてなかったたので統一したら朱 さんに似てる？
V i e rさん、すいません。こうなってしまいました。

第04話ネギま編（前書き）

今更かもしれないですけど、！入れた方がいいでしょうか？

第04話ネギま編

俺はエヴァにデバイスの使い方と魔法を教えた。

その後、軽く模擬戦という名の俺いじめだが、俺はネギではないため、圧勝！

俺「あれ？エヴァさんて、こんなに弱いのか？」

エヴァ「お前が強すぎるんじゃない？ボケ！！大体まだまだ本気まで遠いだよ。ありえん！！お前人間か？」

俺「だから人間じゃないって言ったでしょう？」

エヴァ「そうだったな……。それより、何だ貴様の使っている剣術は、気を使わないのになんでこんなに強い！？」

俺「いえ、もともと、近代兵器とまともにやりあう剣術なのでこれくらいできないと撃たれて死にますよ」

エヴァ「なんだ、そのでたらめな剣術は。」

俺「御神流？」

エヴァ「なんだその疑問形は！！」

俺「だって、私、奥義ほとんど使えないし……自己流の剣術も使うので……」

エヴァ「奥義なしでそれか？どんな剣術なんだよ……」

エヴァがショックを受けてます。

俺「そういえば、カートリッジ百個ひと箱で、五万で売りますよ」

エヴァ「なんだ？その馬鹿に高い金額は」

俺「買わないならいいですよ」

エヴァ「二万！」

俺「使用済みカートリッジ百本にその値段で魔力込めてあげる。」

エヴァ「チツ、カートリッジを二万でよこせ」

俺「やだ 絶対まけない。等価交換ならいいよ。」

エヴァ「はあ、わかったよ、その辺のいらない魔法具と交換だ」

俺「ありがと」

俺は十万円相当の魔法具をもらい、200本のカートリッジを渡した。

俺は別荘を出て荷物から寝袋を出し、その辺に寝た。

第04話ネギま編（後書き）

書き直したくなってきたかも・・・いや、あっちの方が大事ですね。

第05話ネギま編（前書き）

やっと一カ月連続更新!!!
なんか一時間で更新した日があった気もするけど連続だよ!!!

第05話ネギま編

この世界に来ての次の日、学園長に呼ばれた。
扉をノックする。

学園長「ふおふおふお、入ってもらって構わない。」

俺「失礼します。」

俺は学園長室に入る。

俺「すいません、私の戸籍と学園の編入手続きはできましたか？」

学園長「すまんのう、まだ少しかかるが、新学期には間に合うよ」

高畑がいます。ちょっと身構えていますよ。

俺「すいません、昨日は……お詫びにこれをあげます。」

俺は腕輪を渡す。

タカ「これは？」

俺「私の世界の杖です。魔法の詠唱ができないんですよ？それに私が覚えた魔法を組んで入れますので、私が覚えた魔法を念じるだけでできます。起動はセットアップと言ってもらうだけでいいです。起動してください。」

タカ「それは本当かい？セットアップ」

<OK・My master setup>

はつきり言ってデバイスは腕時計型です。他にもリボルバーナックルの形態がありそっちはカートリッジが使えます。

俺「そのデバイスにはAIが入っています、そのデバイスにはクロッカーとある人に命名されたのでその名で呼んでください。まあ、後で説明します。魔法の矢と念じて私にぶつけてください」

タカ「わ、わかった」

高畑は念じる

<サギタ・マギカ>

光の矢が俺を襲う。

<プロテクション>

魔法の矢を簡単に止める。

俺「どう？ 気に入った？ 一応、私がこの世界の魔法を覚える度にあなたが強くなれるけどどう？」

なんか、高畑が感動してます。

タカ「ほ、本当にどうもありがとう。君を疑って悪かった。」

俺「じゃあ、そのデバイスに使うカートリッジを200本10万で

売るけど買ってくんない？もちろんエヴァさんも買いましたよ。」

タカ「買わせてもらおう。後でいいかな？」

俺「いいですよ、あと、カートリッジについては後で説明します。」

学園長「す、すまんが、わ、わしには……」

俺「ない」

学園長「ええっ!?!？」

俺「冗談ですよ、でも、タダではありませんけどね。」

学園長「た、高いの?」

俺「後で話します。」

いやーいい商売です。

ちなみにデバイスマイスターの資格を持っててよかった。

ある程度、話が終わり、高畑はいなくなる。仕事らしい。なんかウキウキしてましたけど……。忘れましょう。

俺「あの、制服は男子用ももらえませんか？」

学園長「なぜ必要なんじゃ」

俺「初日にそれを着て男装して行って、誰が最初に私が女だって気付くかやってみたいので」

学園長「ひねくれておるのう」

俺「真性のドSですから」

学園長「そっそつなの？」

俺「はい」

いい笑顔を忘れない

なんか学園長がちょっと怯えています。

俺「用意してもらえないなら、出席番号一番を消します」

いい笑顔

学園長「そ、それは困る、わ、分かった用意します。させてください。」

あわててます。やはり初恋の人を消されるのは嫌か。

楽勝

俺「じゃあ、お願いします。」

第05話ネギま編（後書き）

ストーリーが意味不明になってますね。この辺で一回休みみたいなと思う。

10下旬です。

第06話ネギま編(前書き)

連続投稿だよ

第06話ネギま編

俺は茶々丸に連れられて、大学の工学部の大学院研究室にいる。ハカセを訪ねた。

俺「すみません、ここで、茶々丸を作ったんですよね？こんなものがあるんですが…」

俺は忍さん家のノエルさんの写真を出した。

ハカセ「この人誰？お姉さん？」

俺「この人オートマタ、分かる？」

ハカセ「へ〜オートマタなんだ〜、ってええ〜！？なんで！？こんな完成度の高いものが存在するの？う、嘘でしょ！？」

俺はDVDを取り出す。茶々丸はそれを受け取りそれをパソコンで再生させる。

その映像にはロケットパンチ、何故か目からビーム<レーザー（鉄が切れます）>を発射。

などなど、人間ではありえないものを使うノエルさんを映したもの。

ハカセ・超「マ、マジでこんなものが日本に（アルネ）？」

俺「マジです、しかも魔力を使わないでの完全起動可」

俺が魔力で動かしたらというまでは完全に電気だけで動いてました。いろいろ質問されることを淡々と答える。

その度にショックを受けています。

超「た、確かに、できるな、私たちにも・・・ハカセ、これから頑張るアルよ！」

ハカセ「茶々丸、私たち頑張るからね。」

俺「俺も仲間に〜」

ハカセ・超「当たり前です（アルよ）」

俺はその日、いや、二日くらい帰らせてもらえなかった。

茶々丸がほぼ、人間になるまであと一ヶ月くらいだそうだ。

俺は研究から外させてもらった。

正直、マッドじゃないし、ただの研究者だし、女だし（本当は男）。
帰る途中で高畑に会いました。うれしそうに話しかけてきましたが
無視。

眠いんだよ！こっちは！

怒っています。

イライラしていて殺気が漏れていたらしく。

高畑がやっと空気を読んで離れてくれた。

エヴァの家に着き、俺はソファで寝た。

次の日は茶々丸にお姫様だっこで抱えられ、研究所に拉致された。

俺「おい、普通の女じゃないからいいけど、普通はあんな風に運ば

れたら怒るからな！！私は惰眠を貪りたいんじやく！！」

俺、久し振りにキレました。

超「そこを何とかお願いネ。」

俺「いやだ」

殺気が充満してます。

二人が怯えています。茶々丸は大丈夫？いや、オドオドしてます。大丈夫じゃない。

俺「帰る」

俺は転移魔法でエヴァの家に帰りまたソファで寝る。
二度と二人が俺の睡眠時間に拉致することはなくなつた。
人間命が一番大事

第06話ネギま編（後書き）

短いです・・・

第07話ネギま編（前書き）

お待たせ！って待ってる人いますか？

第07話ネギま編

今日はいよいよ新学期、エヴァがめんどそうにしている。
まだ、魔力封印の呪いの位置が特定できない。何故だろう？
学園全体とか、サーバー内とか思い当たった節が多すぎる。
まあ、明日には見つかるだろう。

<呪い、見つかりました。マスター>

おいおい、今かよ、場所はつと、あれ？学園全体？
これって……

<はい、その通りです。>

俺「じゃあ、ふっ飛ばすにはここか？」

<はい、この木の近くにあるこの石が弱点です。>

後で破壊に行くか。

ふう、めんどい。

エヴァにそれだけ伝えると、今すぐ行くぞと吠えます
俺はいやだ、これはら学校に行くの、といったらサボれといいやが
った。

仕方ないので、エヴァを気絶させ学校に連れていく、もちろん茶々
丸に許可をもらってから。

エヴァが起きると暴れたが気にせず、学校までつれていく。
俺は高畑に呼ばれていたので校門でエヴァを茶々丸に任せる。
学園長室に着くとネギがいた。

俺「失礼します。」

学園長「おっ！来たか、待っておったぞ。涼ちゃん」

俺「あれ、そこにいるのはアスナさんとこのかさんですね。私は佐々木涼といいます。よろしくお願いします。」

スマイル。二人が赤くなった。

学園長「君たちのクラスに留学に来た子じゃ。」

アスナ「えっ！？だってこの子男の子じゃ？」

俺「ひどいです、アスナさん、私、女の子なのに……」

嘘泣き。アスナさんはあたふたしてる。

アスナ「ええっ！？ご、ごめん涼さん、あの、悪気があったわけじゃ……」

俺「わかってますよ、私もからかう気でしたし。」

この「ええ性格してんなあ」

褒められた。やった〜

俺「気付いてたんですか？」

この「なんとなくな〜」

ちよつと残念。次から一人称は俺でいこう。

俺「じゃあ、ネギ先生と一緒に教室に向かうので二人は先に行つてください」

今の内に学園長がネギにいろいろ説明している。

あつ、しずな先生の胸に挟まれてる。

興味はない。俺は巨乳に興味はない！だけど大きい方が好み。

教室に向かう。

ネギが教室に入ろうとしたので、止める。

俺「すみません、悪戯があるので破壊しますね。」

俺は戸に挟まった。黒板消しをネギに渡し、罨をどんどん外していく。

周りの人の落胆が面白い。

ああっ！このために生きてるって感じ、罨にかかった人を見るより罨を壊されるその顔がたまらない。

俺「ふう、おわり！」

あれ？男の子？嘘？とか言っている。

俺「ネギ先生。入ってきてください。」

ハカセと超には先にこのことを話しているのでニヤニヤしてます。

ネギ「あ、ありがとうございます。」

俺「いえいえ、お構いなく。」

ネギが自己紹介を始める。

しずな先生がいろいろ言っている。
なんかネギが洗礼を受けてます。
その洗礼が収まると。俺の自己紹介が始まる。

俺「え、外国からの留学生の佐々木涼です。皆さん仲良くしてください」

パル「あの、涼さんは何で男性用の制服を着ているんですか？」

俺「わざとです。俺は女です。」

驚きの声が笑い声がいくつか聞こえるが気にしない

俺「明日からはちゃん女性用の制服を着ます。ちゃんと学園長の許可をとっています。」

どうやら馴染めそう。

早速授業だ。簡単なので関係ない本を読む。

ネギが笑われてるが気にしない
授業が終わったようだ。さてと、ネギの観察でもするか。
ネギの観察をしようとする後ろからエヴァが来る。

エヴァ「行くぞ、呪いを壊しに」

俺「はいはい」

俺は渋々エヴァについていく。

エヴァとその後魔力封印のために使っている石？いや、岩ですね。
破壊し、終了、後、ついでなので封印を全部壊しておきました。

次の日、学園長に怒られました。俺にエヴァは逆らえないので、

この学園の大学を出るまではここにいるように言いました。真祖と
はいえ、俺の下に位置する吸血鬼ですからね。契約書を無理やり書
かせましたよ。
本人はかなり嫌がりましたがね。

第07話ネギま編（後書き）

読んでくれている人が居るのか不安ですがとりあえずの投稿です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4598o/>

リリカルな没案！

2011年3月27日23時23分発行